English title:

Philosophical Essays
by Raya Dunayevskaya

* Marxist-Humanism Today

* The Theory of Alienation: Marx's Debt to Hegel

* The Afro-Asian Revolutions

Japanese edition, 1967

3754

ラーヤ・ドナエフスカヤ論文集

アジア・アフリカ革命

今日におけるマルクスの人間主義

アジア・アフリカ革命 5
はじめに 7
アフリカ・アジア革命 9
附録1 新しい人間主義 [illegible]
附録2 アフリカとアメリカ・インディアン [illegible]
主義的人間主義 39
今日におけるマルクスの人間主義 [illegible]
訳外の理論家マルクス、ヘーゲルにつ
いてのところの [illegible]

前進社学習資料 2

3754

3755

訳者まえがき

この論文は、もともと一九六一年四月、ラーヤ女史がデトロイトで執筆し、（発表された機関は不明だが）何らかの形で彼女を中心として組織された「マルクス主義的人間主義者」のグループの出版物に発表され、それとややおくれた同年五月、イギリスのケンブリッジ大学の新左翼にそくする学生たちのグループである「ユニヴァーシティ・レーバー・クラブ」の手によってパンフレットの形で再刊された。私たちのほん訳はケンブリッジのグループによってだされたパンフレットを定本としている。なお、このテキストには、附録二として、「まえがき」の執筆者ピーター・カトガンによる、ラーヤの主著「マルクス主義と自由」に関する書評がのせられていると、私たちにこれを絶賛して、そのかわりに、彼女の発表にもとづいて、アフリカ人によってだされている季刊誌「現代のアンリカ」の一九六三年の第四・四半期号にのせられた、彼女の「アフリカとアメリカのマルクス主義的人間主義」と題する論文をのせることにした。

イギリス版のまえがき

政治は創造的な活動であり、ひとが彼自身の自由を拡大する手段でありうるということは、たえず忘れさられている真理である。一九六一年には、はくたちはようやく、古い世界が崩壊して混沌とした状態がつづいていた一九一四年に入りこんだ政治的な荒廃からたち上ろうとしている。十月革命の勇敢で輝かしい新世界建設の試みは、一九二三年には不幸な結果におわった。人類は、世界戦争いかいにはムッソリーニとヒトラーにたいしてあたえるべき何の答も見出さなかった。第一次大戦と第二次大戦の中間の全世代は、彼ら自身にあたえられた課題を理解することができなかった。自ら「共産党」と称した政党は、教条とテロルの上に尻をすえていたし、自ら「社会党」と称した政党は、指導者たちのチッポケな野

心の上にのつかつていた。政治は汚れた営業になつた。

だが、一九四五年には、一九一八年当時よりも社共両党にたいする幻想は少くなつていた。そして、一九五三年から五六年までの時期—つまりフォルクタやベルリンやポズナンにおける蜂起や、ソ連共産党第二〇回大会や、ハンガリー革命や、スエズ事件のおこつた時期いらいは、そうした幻想のうちでのこされたものは数多くはなかつた。そして、スエズ事件ののちに、アフリカがたち上つた。ついで、イギリスから日本にいたる人民は、原水爆反対の運動を開始したのだ。

厳刻で、最初はハツキリした形をとらず、指導者を以て自任する人たちにたいしても何らの尊敬を払うことのない広汎な討論か、旧来の組織を一掃し、新しい組織をよびおこした。この討論は、数々の成果をうんだが、このパンフレットはそうした成果のひとつなのだ。

モスクワ裁判の時期の間レオン・トロツキーの秘書をつとめていたラーヤ・ドナエフスカヤは、一九三九年のヒトラー＝スターリン協定に関する意見の相違によつてトロツキーと決別し、ソ連の性格についての綿密な再検討をはじめた。そして一九四一年には、彼女は、世界の資本蓄積の過程が一切の資本を集しつつあるものは、「資本蓄積の過程が一切の資本を「ただ一人の資本家ないしただ一つの資本家会社の手に」（向坂訳『資本論』第一巻）ひきわたす結果に終るだろうというマルクスの予言が真理だ、という結論に到達していた。彼女は、このことかすでにソ連でおこつていたことを知つた。国有財産そのものは、資本主義的である点では私有財産ともつともちがわなかつた。五カ年計画下の雇用者と被雇者との間の関係は、本質的には、他のどこの資本主義下のそれとも、本質的には全く同じだつた。ついで彼女は、—アメリカの状勢を研究したのち—新型の資本主義は、ソ連に特有のものではなく、世界資本主義の発展の新しい段階以外のなにものをも意味しないと結論した。国家資本主義はすでに成功していたが、あるいは全世界にわたつて独占資本主義のあとをうけつごうとしていた。

こうした基本的な理論の助けをかりて、（事実そうであるように、まつたく普通の人間がもつている、彼自身の運命を決定する能力についての基本的な信念をもふくめて）、ドナエフスカヤは、マルクスとレーニンの人間主義の再発見をふくめた、新しい社会主義の理念の複合体を作り上げた。こうした彼女の理念は、それいらいこのパンフレットや、彼女の著書『マルクス主義と自由』（邦訳『疎外と革命』）やデトロイトで発行されている月刊紙『ニューズ・アンド・レターズ』のなかにひきつづいてのべられてきた。

イギリスでは、労働党は一九五九年秋の総選挙で壊滅的な敗北を喫した。こんなにうまく組織された政治運動が、こんなにもみじめな結果をうみだしたことはいまだかつてなかつた！も一度あらためて考え直すことが、これまでのいかなる時よりも一層必要なことはあきらかだ。

ケンブリッジでは、ユニヴァーシティ・レーバー・クラブにそくする一群の左翼学生たちが、以前よりも一そう深く、運動のなかで一体何が間違つていたかを研究し、レーバー・クラブの批判的な雰囲気のなかで、さらに彼らの機関誌『ケンブリッジ・フォアワード』のなかで、彼らの結論をテストするために非公式な集りをもちはじめた。このパンフレットの出版は、そうした活動の成果のひとつ—つまり、いわば出版活動における左翼グループの洗礼式なのだ。そしてわれわれは、それが新しい社会主義的国際主義にたいする意味ふかい貢献であることを望んでいる。

一九六一年五月一五日

ピーター・カドガン

3757

ナショナリズム・共産主義・マルクス主義的
人間主義ならびに

アジア・アフリカ革命

ラーヤ・ドナエフスカヤ
三浦正夫訳

3757

3758

はじめに

アフリカの現実と世界の政治

一九六〇年は、アフリカの一六に上る民族がイギリスとフランスからの解放を達成した年であり、ベルギーが、コンゴにたいして、経済上ならびに政治上ではこの国をその手中にかたく握りつづけながらも形式上の政治的独立だけはみとめてもいいと考えた年だつた。資源の豊富なカタンガ州では、コンゴ人民は、白人の帝国主義が黒人の傀儡政府を通じて詰すことかできるという新しい事実に直面した。コンゴ共和国の独国後僅か三日にして、モイズ・チオンベはカタンガ州の「独立」を宣言し、パトリス・ルムンバ大統領は国連の援助を要請した。こうした国連の介入の根本には、核戦力を保有する二大巨人ソ連とアメリカの間の闘争の新しい形態がひそんでいたのだ。

国連総会でのフルシチョフの演出は、ソ連が国連のコンゴへの介入に賛成投票をしたという事実を世界の人々に忘れさせることをねらつたものだつた。抗議のために、靴をぬぎそれでテーブルをガンガンたたくことによつて、彼は、それより先すでに国連軍の派遣を承認していたにもかかわらず、世界中の人々の眼前で、コンゴにたいするソ連の政策と国連の政策とを分離したのだつた。ルムンバの側にたつことによつて、彼はアフリカとアジアの人民の心をとらえるための闘いに従事した。なぜなら、種族の絆をこえて、真に民族的な独立運動を樹立してきたのはルムンバだつたからだ。

ルムンバは国連の援助を要請していたが、それは、彼が独立を維持するためにはソ連とアメリカの双方を利用できると考えたからだ。だが、この双方を利用することができる以前に、彼の方がさきに利用されてしまつた。

ルムンバが殺害されたのは、彼の指導するコンゴ民族運動に反対するベルギー帝国主義とそのアフリカ人の傀儡たちの動きをアメリカ帝国主義者が黙認した事実から生れた避けることのできぬ結果だつた。ケネディ大統領と国連大使が流したワニの涙は、フルシチョフか、アントアンヌ・ギゼンガ政府を承認しこれを支持することによつてコンゴへの足場をつくるために、ルムンバの殺害を利用しようと意図していることがあきらかになるやいなや、大いそぎでぬぐいさられた。

国連、つまりアメリカのコンゴ（ならびにその植民

ゴウリニウムやコバルトやチタニウム）支配にたいするソ連のこうした挑戦は、たちにアメリカによつて反戦されることになつた。ソ連は後退し、その国連大使ヴァレリアン・ゾーリンは、セイロンやアラブ連合共和国やリベリアが提案した、「内戦を停止させるために軍隊を使用する」権限を国連にあたえるべしという決議にたいしては拒否権を行使するなとの訓令をうけた。

国連がコンゴの内戦を停止することができるかどうかは、疑わしい。だが、国連が、アメリカとソ連の間の世界的な権力獲得闘争を停止できないことは確実だ。分割の脅威はいま悲劇的なコンゴ全土を覆つている。これまでにもすでに、二つのドイツ、二つの朝鮮、二つのヴェトナムがあつたが、いまや二つのコンゴが生じねばならぬのだろうか？

一九六〇年は、アフリカの解放闘争の転換点だつた。たとえば、人種的差別制度をとつている南ア共和国でのように、アフリカ人たちが敗北を喫したところでさえ、彼らは憎悪の的となつていた通行証を大衆的に焼き払い、「イズグエ・レツウ」（「わが祖国」）を勇敢に高唱することによつて、全世界の人々に電撃をあたえた。すでに政治的解放を獲得していたガーナやギニアでは、彼らは経済的独立のための闘いに直面しはじめた。カメルーン、中央アフリカ共和国、チャド、コンゴ共和国（ひとつは旧ベルギー領、いまひとつは旧フランス領）、ダホメ、ガボン、モーリタニア回教共和国、象牙海岸、マラガシイ（旧マダガスカル）、マリ（旧フランス領スーダン）、ニジエール、ナイジエリア、セネガル、ソマリア、トーゴ、ならびにオートボルタ共和国—以上の一七に上る新興独立国がアフリカに生誕したのだ。

すでにこの年の終りには、ポルトガル領アンゴラにおける「静かな」独裁的なテロルの支配する地域をもふくむ白人至上主義者の支配下にある大陸の城も暗黒な片隅にも光が投ぜられていた。ローイ・ウエレンスキー卿率いる「ローデシア（一九六四年に独立してザンビアとなつた）では、ケネス・カウンダの周囲に結成された統一民族独立党からの猛烈な挑戦をうけ、ニアサランド（同じく一九六四年に独立してマラウイとなつた）ではバンダ博士を頭目するマラウイ会議党からの猛烈な挑戦をうけた。

ローイ・ウエレンスキー卿の「多数人種主義」がフェルワート（南アフリカ共和国首相で猛烈な人種差別主義者）のファシスト的なアパルトヘイト（南ア共和国の人種差別制度のこと）政策の別名にすぎないことは余りにもハツキリしているけれど、ケニアと南北ローデシアの白人自由主義者たちは、一体なぜ「多数人種主義的な」政党よりも民族主義的な政党がアフリカにおける解放の手段として利用されねばならぬのだろうかという問をだしている。コーリン・モリス師がだしたこうした質問にたいして、ケネス・カウンダはつぎのように答えた。

「あなたが、私たちが望んでやまぬ独立をすでに達成

3759

した、アメリカの諸民族をごらんになれば、どの場合にも解決をもたらしたのは民族主義的な運動だつたということを発見されるでしょう。多数人種主義的な政党は、いまだかつて、アフリカ人のために独立を獲得したことはありませんでした。

私たちは、たんにアフリカ人の権利だけに関心をもつものではありません。私たちは、人間の権利のために—つまり一切の人間の譲渡することのできぬ権利のために闘つているのです。私たちは、どんな形をとろうと、一切の帝国主義や植民地主義に反対する闘争に従事しています。そうした帝国主義や植民地主義の代理人が日本だからではなく、帝国主義や植民地主義は、よい側面よりもはるかに多くのわるい側面をもつているからです。：

私はここで、つぎのことをつけ加えねばなりません。それは、つまり、私たちの国家統制の問題にたいする唯一の有効な解答は、イギリス政府が少数者のグループから多数者のグループ、すなわちアフリカ人へ丁重に権力を譲渡することだと、私が信じていることなのです。アフリカ人たちが感ずる幸福は、彼らにかつての不幸を忘れさせ、過去を過去として葬らせるでしょう、こうして北ローデシアには、どんな人種をも迫害することなく、一切の住民の幸福に奉仕する、黒人の支配する新しい国家が生れるだろうと、私は殆んど確信しています。なぜなら、多数者が少数者のグループをおそれることはナットもないからです」（「黒人の政府」ケネス・カウンダとコーリン・モリスの間に行われた討論）。

アフリカ人民の偉大な創造的活動の爆発によつて、わずか一〇年という短期間のあいだにアフリカの地図はスツカリかきかえられ、したがつて、世界の地図もかきかえられた。こうした運動がまだアジアや中東の革命によつておおいかくされていた初期の頃でも、人類が、世界史の発展のなかで全く新しい、より高い段階に到達したということはあきらかだつた。

アフリカ人民の解放運動が第二次大戦中、まずフランス領マダガスカルに、ついで戦後イギリス領ケニアに勃発したとき、それはおそるべき暴力の大狂宴に遭遇した。だが、イギリス帝国主義は、マウ・マウ団の経験によつてつぎのような教訓をさずけられた。—つまり、今後の独立闘争は、経済上の特権だけは留保するという妥協をいだいて、丁重に処理せねばならぬという教訓を。

ドゴールのフランスは、アルジエリアにおいて回教徒の革命家たちとの間に闘わされた、遠々とつづいた苛烈な戦争からは何ごとをも学びとらなかつたけれど、ナツポケなギニアの勇敢な「ノー」というあたりにこだまする叫びから、フランスは、サハラ以南のアフリカにある以前の植民地では、やり方をかえるべきだということを学んでいた。それいらい、解放の上げ潮は、旧来のイギリス、フランスならびにベルギーの帝国主義を波間にまきこみ、二年という短期間のうちにさきに列挙した諸国にガーナとギニアを加えた一九に上る独立国がアフリカに登場をあらわしたのだ。

解放の潮流は、はかの植民地の壁にもあらわれている（聖書ダニエル篇五章五節にみえるたとえ話に由来する。不吉の前兆のこと）。一九六一年にはすでにタンガニーカが独立国の列に加わつた事実がみとめられる。そして、ケニアのように反革命的な白人の植民者たちががんばつているところでさえも、解放のために闘いつつある人々が、独立の延期をみとめようとは決して考えていないことはあきらかだ。自由の潮流は西部と東部をとわず、南部と北部とをとわず、アフリカの全大陸にたからかにうちならされたのだ。

一九五〇年代への一瞥

アフリカ人たちが自由にむかつて前進するにつれて、ソ連の指導者たちは、たえず、彼ら自身によつてとくに曲解されたマルクス主義を利用しようと身構えている。今日の共産主義がマルクスのいだいた理念に真正面から対立しているということは、共産主義者たちがハンガリーの革命を野蛮に弾圧したことによつてあきらかにされた。一九六〇年の夏フルシチョフが国連で行つた演出は、一九六〇年の一二月にモスクワに集つた八一に上る共産党によつて、「独立した民族民主国家」（「共産党・労働者党代表者会議の声明」、石堂編『現代革命と反独占闘争』三五五頁）に関する理論にホンヤクされた。ソ連が、少くともアフリカでは、自由を擁護していると信じようとする人々は、五〇年代の記録をより詳しくしらべてみればいいだろう。

一九五三年から五四年にかけた頃までは、ソ連の指導者たちはアフリカについてはほとんど関心を示さず、クワメ・エンクルマを「イギリス帝国主義の代役をつとめる民族主義者」と名づけていた。これは以前にインドのネールのためにとつておかれたレッテルだつたのだ。ソ連の共産主義者は、その他に共産主義者がいないという理由があれば、アメリカ側にもソ連側にもつかない、非共産主義の世界にたいしては、これを疑惑の目を以てながめていた。とくにアフリカではそうだつた。アフリカには、共産主義者がいないばかりでなく、一しよに「人民戦線」を結成すべき相手もいなかつた。しつかりしたプロレタリアートもいなければ、めだつた土着のアンリカ人ブルジョアジーもいなかつた。解放運動を指導していた中間階級の知識人たちは、モスクワではなく「西側」で教育をうけていた。たとえこうした人々が夢をいだいていたとしても—そして彼らは実際夢をいだいていたのだが—それはソ連共産主義の夢ではなく、汎アフリカ主義の夢だつた。独立をかちとつた故初の国ガーナの例からみられうるように、当分の間は、指導部はソ連よりもイギリスにより一そう接近していたのだ。

ブルシチョフは、新しい世界がたち上つてくるのを見たが、この世界は何ひとつソ連の世話になつてはいなか

つたし、ソ連の歩んだ途につづこうという傾向をも示さなかつた。彼は、この世界を失つてならないものならば、この世界に介入せねばならなかつた。だから、国連での演出が行われ、八一カ国の共産党の宣言が「独立した民族民主国家」にいわゆる純粋な支持をあたえることになつたのだ。

一九五六年に、フルシチョフは、はじめて、帝国主義戦争は「不可避ではない」と宣言した。彼がソ連共産党第二〇回大会の席上でやつた有名なスターリン主義反対の演説によつて、スターリニストたる彼は、今後「マルクス・レーニン主義」の汚れなき旗のもとに前進することをみとめられたのだ！　こうして、彼は、自分自身の汗と血とによつて西欧帝国主義からの独立をすでにかちとつていた国々の面前に、解放の理論の唱導者としてたちあらわれることができたのだ。

非スターリン化は、ソ連の方針転換の第一歩だつた。だが、一九五〇年代のフルシチョフに自信と過信をいだかせたものは、スプートニクだつた。スターリンは、もし彼が中立国を完全に支配することができない場合には、これらの中立国にたいして鉾先の目をひからせていたのだが、フルシチョフは中立国を熊のようにだきしめ、彼らにたいして、きみたちは独立の途をすすむことができると告げた。新しい宣言はつぎのように説明した。「人類の生活のなかに新しい歴史的時期がはじまつた。すなわち解放をかちとつたアジア、アフリカならびにラテン・アメリカの諸植民が国際政治のなかで積極的な役割を演じはじめた」（前掲書三五二頁）と。もしここにいわゆる「国際政治」なるものが共産主義の政治であることに疑をいだくものがあるとするならば、彼にこの宣言をよませようではないか！

戦争は「決して宿命的に不可避的なものではない」という、フルシチョフがアフリカ・アジアならびにラテン・アメリカの世界にあたえつつある「国際政治」に関する教訓は、スプートニクとICBMをもつソ連が、その政策をなんらかの方法で西側の政策に従属させていることを意味するものではない。反対に、ソ連は「平和共存」のチャンピオンなのだ。なぜなら、「決して宿命的に不可避的なものではない」戦争とは、西側が、小規模な戦争が核戦争による大虐殺をひきおこさないようにと薄氷をふんで歩きつづけることを意味するから。だから、「独立した民族民主主義国家」ははるかに大胆にアメリカに挑戦してよろしい。ソ連は、彼らを援助するために全力をつくすだろう。要するに、「平和共存」とは、コンゴからキューバにいたるまで周到な注意をはらいながら一切の危機を醸成することだ。

アメリカとソ連という、たがいに闘いつつある国家資本主義の両極の間で身をひきさかれることをさけるために、アフリカの大衆は、ロシア人であると、西欧人であると、アメリカ人であるとをとわず、技術的に進歩した諸国の労働者の方に直接むかわねばならぬ。こうした観

論の動機にそうて考えるときは、精神的労働と肉体的労働とを分離させているオートメーションに反対するアメリカやヨーロッパの労働者の闘争のことが顧られねばならない。

最後の勝利をかちえたモントゴメリー市のバス・ボイコット闘争（一九五五年一二月から約一年にわたつて五万の黒人市民によつて行われたがバスの人種的差別反対闘争のこと）いらい、とくに盛り込み闘争（一九六〇年春、とくに黒人大学生を中心として行われたレストランの人種差別反対闘争のこと）いらい、アメリカにおける黒人の自己活動は、アフリカ革命のための力の貯蔵所なのだ。黒人は決して皮膚の色の問題としてアフリカ革命に共鳴しているのではない。彼は、彼の日常生活のなかで、現存する社会との闘争のなかで革命的なのであり、したがつて彼はアフリカ革命の意味をジカに深くみとめているのだ。そして、アメリカの生活のなかで黒人はユニークな立場にたつているために、黒人はアメリカ労働者階級全体にたいする刺激となつている。

シャープビルの虐殺（一九六〇年に南アフリカ共和国のシャープビルで、通行証制度その他の人種差別制度に反対する黒人のデモにたいして政府が加えた大弾圧によつて数百に上る黒人男女が虐殺された事件のこと）に反対してロンドンで開催された大衆的デモンストレーションのなかで、「南アフリカ連邦製商品のボイコット」運動のなかで、イギリスの民衆は、アフリカの地で解放のために闘つているすべての人々にたいしてのよい親近感を示した。こうした親近感は決してたんなる同情の表明にはとどまらない。それはもともと資本主義に反対する日常の闘争に固有のものなのだ。

技術的に進歩した国の労働者の大多数の援助がなくては、アフリカの革命もアジアの革命も、資本主義的な搾取や官僚主義的な国家計画の担当者たちの手からのがれることはできない。

一九五九年の六月に、私がはじめてアフリカの革命を分析したとき、私は、「こうした偉大な覚醒は、十字路に永久にたちつづける運命にある、旅路の中途の宿屋にとじこめられることになつている」のかどうかとたづね、「こうした偉大な覚醒は、：：国家資本の両極のうちの一つ—つまりソ連かアメリカ—のいずれかをえらばねばならないのだろうか」とたづねた。

このパンフレットの第一版のなかで、当時わたしがこの問いにたいしてあたえた答は、わたしにとつては二年前と同様に今日でも有効であるように思われる。

一九六一年四月

アメリカ、ミシガン州デトロイトにて

ラーヤ・ドナエフスカヤ

アフリカ・アジア革命

一九六〇年の独立にあたつて、およそ三五〇〇万の人口を擁している西アフリカ最大の国ナイジェリアは、あらためて、独立とは新しい国のことを意味するのか、それとも帝国主義的な搾取が地理的ならびに種族的に分割されている国土のなかでひきつづいて行われるかもしれぬ場所を意味するのか、といつた問に直面した。

ナイジェリアは、双方ともに同様に十分な準備をととのえて、解放運動を国家資本の両極—つまりソ連とアメリカ—のいずれかにしばりつけようとこころみている。共産主義と道徳再武装のうちのいずれをえらばねばならなかつたのだろうか？

汎アフリカ主義

汎アフリカ主義とよばれる新しい型のナショナリズムをめざす理論的な出発点とは、W・E・B・デュボア博士によつて興開された哲学だと思われるだろう。ちなみに、デュボア博士とはすぐれたアメリカの歴史家で、一九〇七年にはアメリカの黒人のための完全な権利を獲得することを目的としたナイヤガラ運動の創立者だつた（彼はナイヤガラ運動の挫折後、一九一〇年には全国有色人向上協会に参加し、やがてその改良主義的政策に反対して一九三四年にこれを脱退し、第二次大戦後共産党に入党、昨年逝去した）。

不幸にして、デュボアがいだいていたアメリカの黒人の進歩に関する考えがたえず「才能ある十分の一」という考え（アメリカの黒人解放を黒人中の少数のインテリのエリート層の指導に期待するという考え）を土台にしていたのと全く同様に、彼がいだいていた汎アフリカ主義の哲学も帝国主義の制度の中で働いている「才能ある十分の一」もしくは「思考するインテリゲンチャ」といつた、さきの考えを一対をなす考えを土台にしていた。一九一九年に行つた彼の最初の声明のなかには、つぎのような文章がよまれる。思考するインテリゲンチャを通じて、黒人人種は、国際連盟の傘下に、黒人問題研究所が設立されることを要求する」。

ところが、第二次大戦とともに情勢は一変した。こんどは、数百万に上るアフリカの黒人大衆が解放を要求しつつあつたし、現にこれを要求しつつある。彼らは、数世紀にわたる帝国主義的な搾取—つまり、たえず白い飢

をかぶつた搾取—から自由への道の途上にある。「即刻アフリカ人のためのアフリカを」という要求は、たとえそうした交換がはじめはどんなに喜ばしいことであつても白い顔をかぶつた抑圧を黒い顔をかぶつた抑圧と交換することではなく、運命を自己自身の手中ににぎることを意味する。

他方で、理論としての汎アフリカ主義とは、エチオピアのような王国や、リベリアのような土着の黒人経営者を頭目するアメリカ帝国主義の前哨地点をもふくむアフリカ合衆国という目標のことを意味する。運動の指導にのりだした指導者たちの間では—そして彼らのうち以前マルクス主義者だつた者も二、三にはとどまらないが—新しい国民の運命という問題は、行政と権力の問題に結着させられた。こうして権力を手に入れたのちはじめて、彼らはその権力にふさわしいイデオロギーを探求するだろう。

かつて四分の一世紀の間コミンテルンの位階制のなかにいて、その後間もなくこれと袂別した西インドの作家、故ジョージ・パッドモアの例から私たちがしりうるように右のようなやり方の中には、たしかに自由を求める偉大な昂揚は具体化されてはいなかつた[1]。彼パッドモアのコミンテルンからの袂別は、本質的な問題にもとずくものではなく、むしろ権威の問題にかかわるものだつた。彼の共産主義的な—つまりは国家資本主義的な心理は、以前よりも一そう深く彼の心に根をおろすことになつた。

アフリカ人民も国家権力を獲得しつつあつたからだ。ソ連は、彼にとつて、依然として仰ぎみるべき国家権力だつた。彼はたんにソ連の国家権力から袂別しなかつたばかりではない。彼は、イギリスやドゴールのフランスやアメリカのそれをもふくめて、彼が「利用」できるかもしれぬと考えた一切の国家権力から袂別することはできなかつたのだ。

同時に、パッドモアは、エンクルマ大統領の「アフリカ問題に関する顧問」としてアフリカで最初の独立国、ガーナにくつついた。彼は、ガーナにくつついた。彼はガーナとエンクルマとを「行動する汎アフリカ主義」となづけた。

やがてエンクルマは、汎アフリカ主義にガンジーの「非暴力主義」とアジアの「中立主義」とを接木した。一人の熱狂的なエンクルマの崇拝者がいつたように、「革命史上の注目すべきエピソードのひとつのなかで、彼（エンクルマ）は、独力で、マルクスとレーニンとガンジーの理念にもとづく精神の大綜をかいた……」[2]。ともあれ、こうした汎アフリカ主義を採用することは、アフリカにおける解放運動の水路をひらき、この運動を世界国家資本主義の秩序の内部にとじこめる目的に奉仕するものだ[3]。

こういつたからといつて私は決して万事がそんな状態のままにとどまろうとしていると考えているのではない。自由にむかう偉大な昂揚はそうたやすく抑圧されるもの

ではない。現代の植民地革命は、極東と中東とアフリカにおよそ二二に上る新国家を生誕させた。こうした歴史的な波は、決して西アフリカでも進路をかえはしなかった。まして、東アフリカや北アフリカやアパルトヘイト（南ア共和国で行われている黒人にたいする人種的差別制度）の支配下にある南アフリカでは決してそんなことはなかつた。たとえ、私たちがしばらく話を西アフリカにかぎつてみても、工業化の問題を解決する道は決して資本主義にそつてすすむ一本道だけではない。

世界資本の二大勢力がどんなに強力であろうとも、新興国民は、ひとたび彼らが、技術的に進歩した諸国の政府にたよることをはなれて大衆に依頼する方にむかうならば、歴史の十字路に永久にたちつづける運命にある、旅路の中途の宿屋にとじこめられることをやめるだろう。このことは、たんなる希望的な観測でもなければ、全然海図のない海に漂う問題でもない。

朝鮮戦争はアメリカの歴史上で最も人気のない戦争だつたが、一方アルゼリア戦争は、アルゼリアと闘うために派遣されたフランスの青年の一部の間に実際に暴動を生じさせた。現在の列強は、こうした徴候をよみちがえはしなかつた。彼らは、アジアならびにアフリカ革命から手をひくように告げられていることを知つている。

他方で、古い急進主義者たちは「同情」をしめし、資本主義的な工業化の誤いがいにはアフリカやアジアにとつてひらかれた道はないのだという彼らの信念を示す、もの分りのいい顔をして、こうした革命を否定する傾向にあるようにみえる。彼らが心理的に新しい時代にすむことができないのは、過去の理論や現在の事実に抵抗しているからだ。

世界の対極では

地理上でも産業上でも、さらにたんに極力の点はかりでなく、進歩した、だが非政治的だといわれている労働者に関しても、アメリカはアフリカの対極にたつているように見える。

ヨーロッパの知識人にとつてばかりでなく、ヨーロッパの労働者にとつても、アメリカの労働者階級はひとつの神秘のように見える。ヨーロッパの知識人や労働者たちは、アメリカの労働者が産業上の闘争のなかで示す戦闘精神は十分にみとめている。だが、アメリカの労働者が労働者政党をつくつていないので、彼らは非政治的であるように見えるのだ。だが、アメリカの労働者が資本主義にたいする反対の気持をヨーロッパの労働者とはちがつた風に表明していることは事実だが、彼らが非政治的だとかヨーロッパの兄弟よりも反動的でないとかいつたことは真実ではない。

景気が後退し、人民の心のなかで共和党が恐慌と同一視されているにもかかわらず、数千万に上る人々が、朝鮮戦争を終らせることを約束したという理由でアイゼン

ハワーに投票したという事実は、平和の問題が、ほかのどんな問題よりもつよく労働者の心中を支配していることの十分な証拠なのだ。投票でトルーマン政府を追出すことによつて、労働者は同時に新しい政府の任期をも制限した。

朝鮮戦争はアメリカ史上最も人気のわるい戦争だつたという発言は、たんに、中国の共産主義者によつて若干のアメリカの軍人にはどこされた洗脳に関連するものではなかつた。（フォーバス知事（アーカンソー州知事）で人種差別主義者の巨頭）とリトル・ロック事件（一九五七年九月、アーカンソー州リトル・ロックで行われた、黒人学童の共学制高校入学に反対する白人暴徒の暴動事件）があるかぎりは、共産主義者による洗脳は容易たろう。だが、洗脳について最も注目すべき事実は、この言葉が工場の労働者によつて、経営者や労働組合の指導者による「話しかけ」のことを指すために、きわめて急速に用いられるようになつたことだ）。

私たちの時代は、まさしく、人間の精神のための闘争の時代として特徴づけられてきた。そして、こうした闘争は、まさに開始されたばかりなのだ。

私たちは「はるかこなた」で、安全で健全で無関心でいるけれど、アメリカとアジアの革命は、決して二つの大洋と七つの海と巨大な大陸とをこえた「はるかかなた」で行われているのではない。それは空中から落くたれさがつている戦争であるばかりではない。「後進」諸国における自由のための新たな闘いは、「先進」諸国の労働者たちの心臓や精神や期待につよく迫つている。

ケニヤのトム・ムボヤがアメリカで講演旅行をこころみたとき彼の話をききにやつてきた数千に上る労働者や学生たちは、右にのべた事実を示す徴候なのだ。もつと大きな徴候は、労働者たちが、彼らを賃金奴隷たらしめる労働条件に反対してつづけている日常闘争であり、彼らの全生命の活動を、彼らを過度の労働にかりたてたり職場から投げだしたりする怪物のようなオートメ化された機械の附属品にかえてしまうような労働条件に反対する日常闘争だ。

世界の両極で闘われている二つの種の闘争が、いつ、どこで、どのようにして、全体的に新しい社会のための統一された闘争に合流するかということは、ある程度までは、民族解放運動がいつ、どこで、どのようにして、次は何かという問に答えるかということによつて、決定されるだろう。

世界資本主義の新しい段階—国家資本主義

第二次大戦が終つたのは、世界の覇権をうかがう二つの新しい競争者—ソ連とアメリカとが、ここしばらくの間は十分なものをもつていたからにすぎないことはあきらかだ。あたかも、平和とは戦争と戦争との不安定な中間期にすぎないことを証明するもののように、彼らはそ

の全進路にそつて二つのドイツ、二つの中国、二つのヴエトナムという里程標をおいた。

ロシア人たちは、東ドイツから満州にかけて目にふれる一切のものを掠奪しはじめたが、ただひとつの富める勝利者アメリカは、奪うよりもむしろ与えねばならぬと感じた。アメリカは、敏速に、西欧をプロレタリア革命による直接の襲撃から「救いだす」ためにマーシャル・プランに着手した。

アメリカは、当時「勝利した同盟国」（イギリスとフランス）の植民地帝国に終止符をうちつつあつた植民地革命の上昇潮をくいとめることはできなかつた。極東や中東や地中海沿岸地域やアフリカ—いたるところが反乱にわきたつていた。だから、アメリカは、同時に低開発諸国への援助のためのポイント・フオア計画（一九四九年に当時のアメリカ大統領トルーマンが宣言した低開発諸国への大規模な援助計画）に着手しなければならなかつたのだ。ソ連もまた、もし世界を支配するための競争をつづけようと思うならば、彼ら自身の「低開発諸国にたいする援助料」を開始する方がいいだろうと見てとつた。

一方ではソ連、他方ではアメリカに課せられた問題は現在のように発展と衰退の段階まですすんだ資本主義が「過剰生産」や「余剰資本」によつてではなく、投下された資本量に比べた利潤率の低下によつてくるしんでいるとき、低開発諸国にあたえるべき資本をどこで手に入れるかという問題なのだ。一言でいうならば、たえず拡大をつづけるために必要な資本の総量はひどく不十分なのだ。一体どうしてこんな矛盾が生じたのだろうか？

私たちは、「純粋に経済的な」観点からみてさえも、資本主義の崩壊に関するマルクスの予見が理論から生活にまで移つてきた時代に生きている。一九五〇年代の一〇年間は、せまい資本主義的な条件のなかでの資本の問題を生き生きと強調している。一方、これと同時に、この一〇年間は、たとえ（労働者の）「一日にまる二四時間が、ことごとく資本によつて領有され尽」るとしても資本主義は崩壊するだろうという、マルクスの極端な仮定をあきらかにしている。

マルクスの主張は、剰余価値は生きた労働からしか生じないから、資本主義制度は崩壊するだろうという点だつた。しかも、こうした労働の搾取にもとづく、資本主義の発展の矛盾した傾向は、資本主義が生きた労働をますます少く、機械をますます多く使用することだ。ますます大量の死んだ労働を動かすためにますます少量の生きた労働しか必要としないという矛盾は、同時に大量の失業者軍と利潤率の低下をつくりだす。

帝国主義の最盛期には、アフリカの分割や東洋の植民地化からひきたされた超過利潤は、マルクスの予言と矛盾するようにみえた。そこで、たんにブルジョア経済学者はかりでなくローザ・ルクセンブルグのようなマルクス主義者たちでさえ、私たちが資本主義をほりくすすために利潤率の低下をまつのは、「月が消える」のをまつようなものだ、とかいた。

利潤の量がどんなに増大しようとも、不払労働時間の搾取がどんなに重く労働者の背中を圧しようとも、真実のところは、気違いじみた資本主義制度を、ますます増大する規模で、全く同じ利潤獲得の動機をもつてうごかしつづけるにたりるほど十分な資本は生産されないということだ。ちようど一九二九年の世界恐慌が先進諸国で、このことをあきらかにしたのと同様に、一九五〇年代のアフリカとアジアの革命は、繁栄期においてすら、先進諸国は低開発諸国の経済を発展させるにたりるほど十分な資本をもつてはいないということをバクロした。生産の動機となる力がひきつづき剰余価値（もしくは不払労働時間）を蓄積することであるかぎり—長期の工場のためであろうと国家の宇宙船のためであろうと、人間の労働をまるまる二四時間領有するために支配階級がどんなに努力しても、まだ「後進国」を工業化するにたりるだけの十分な資本をつくりだすことはできない。理論と事実とは、たがいにきわめて密接に接近してうごいてきたので、今日では、世界のどこかに余分の資本があると主張する人を見出すことはむつかしいだろう。このことは、インドや中国やアンリカやラテン・アメリカや低開発諸国の経済を見れはあきらかだ。西欧やアメリカのようなソ連でも、このことは同様にあきらかだ。故世紀にわたる世界支配ののち、資本主義の理論的代弁者たちは、いまや、世界の三分の二が飢えており、のこりの三分の一は、ますます多くの労働者の労働を領有する方法を発明することに繁忙をきわめていることをみとめている。

本質的には、この点では、私的資本主義と国家資本主義の間にはなんの相違もない。一九六一年にこのことはドラマテイックに確証された。つまりこの年に、強力なソ連が、世界最初の宇宙飛行士ユリ・ガガーリン少佐がしとげた地球を弾道飛行するというすばらしい事業の成功にむくいて彼に贈るためにみいだすことができた最大の賞品が、彼と妻と二人の子供に、この時まで彼らが住つていた二部屋のかわりに四部屋のアパートをあたえることだつたのだ。

資本主義の絶望的な袋小路をみて、「キリスト教的」国際主義の理念を「西側」に売りこもうとのぞんでいる若干の明敏なブルジョア経済学者がいる。彼らは、もしこうした理念をその上にうちたてるべき、ある種の分割支払計画を発見できるならば、それは資本家階級にとつて「重すぎる重荷」ではなく、同時に低開発諸地域の指導者たちにとつても結構快適なものとなり、彼らは全体主義的な共産主義、すなわち国家資本主義に反対して「民主的資本主義」をえらぶだろうと感じている。

こうした明敏な経済学者の一人はバ！バラ・ワード女史なので、彼女はガーナの首相エンクルマにえらばれて、ガーナ大学で「世界問題に関する連続講演」をこころみた。そこで彼女はつぎのようにのべた。「アメリカの対

3764

外投資は、対外貸附が最も盛んだつた頃イギリスが行つたそれの辛じて五分の一にすぎない。今日の世界の悩みの種は資本の不足なので、たがいに競争している資本家たちの間に行われる、海外進出と投資のための闘争では決してない但」。

それにもかかわらず、ワード女史は、西欧諸にむかつて投資と贈与をするように説得しようと欲している。それゆえ、彼女は、資本が不足していることを知つているにもかかわらず、「持てる強国」がアフリカ人やアジア人に、「現在の段階で」彼らの経済が「吸収」できるものをあたえることができるという、彼女のテーゼの宣伝をやめてはいない。実さい彼女は低開発諸地域が必要とする資本の総量は「アメリカの国民加得のほんの一%にも当らない位」と主張している。

滑稽な点は、「現在の段階で」という言葉のなかにある。彼女は、経済をして、一時期にほんのわずかな工業化しかさせないものは、まさに労働者の後進性だ—つまり「賃金労働者の不足こそが工業化をきびしく制限する要素だ」という点を強調している。資本の貸付あるいは贈与は「四〇年ないし五〇年間」—少くとも半世紀を下らぬ期間にひきのばされることになる！ ワード女史がいそいでいないことはあきらかだ。だが、自由を獲得しつつある人類はいそいでいる。

アジアとアフリカの人民は、（土地改革や身分制の解体はいうまでもなく）彼らの経済の工業化を数世紀にわたつてひきのばそうとは決して考えていない。有色人種の世界の人々に憤慨の念をもつて中国をながめさせているのは、まさにインドにおける経済近代化のこうしたのろいペースなのだ。

外見上所しい工業化への道は、中国によつてきりひらかれた。解放に関するマルクス主義の考えを勝手に奪いとり、これを修正して腐敗した蔣介石政権を一掃する場合に利用することによつて、毛沢東の中国の、世界の有色人種にたいする牽引力はいちじるしくたかめられた。朝鮮戦争も第一次チベット占領も、新しい基礎の上に半封建的な政権を再組織するためにあらたに解放された創造的エネルギーと自由についての印象を変えはしなかつた。インドの工業化ののろいペースとくらべるならば、ソ連型の計画をもつ中国は、イギリスの鉄鋼生産に挑戦しながら例、まつしぐらに技術的に進歩した世界の中に突入したように思われた。

だが、どれほどの「大躍進」がなされようとも、それはすべて、大衆のヘシまげられた背中の上でなされたもので、決して大衆のためになされたものでなかつたことは、ただちにあきらかにされた。夜明けから日落れにいたるまでの苦しい労働の結果として確立されつつあつたものは、決して新しい社会ではなく、国家資本主義的な全体主義だつた。中国共産党があえて「人民公社」と称したものの内部に、兵営の労働と、兵営の規律と、兵営の家族生活とを確立することによつて、ソ連よりもより

よく前進しようとする毛の中国の試みは、有色人種の新興国民に中国にたいして以前とはちがつた考えをいだかせた時。

チベット人の反乱は、労働者評議会を結成するにいたつたハンガリー革命の壮大さとは比較にならなかつたし、またチベット人は官僚主義的な共産主義に直面して反乱をひきおこした最初の人々でもなかつた。フランス帝国主義反対の闘争にさいしては容赦なく闘いぬいたグエトナムの農民たちは、すでに数年以前にホー・チー・ミンから縛れさつていたのだ。だが、その他の有色人種にとつては、当時はアジアの共産主義を再検討する機会はまだ熟していなかつた。だが、今日、アフリカは、工業化への中国の道に疑問を投げかけようとしている。

知識人の官僚と労働官僚

これらの民族解放運動が一そう発展することを妨げる最大の障害は、こうした解放運動を「指導する」ために姿をあらわした知識人の官僚制にゆらいする。これと同様な具合で、資本主義を克服しようとする労働者階級のすすむべき道上に横たわる最大の障害は、彼らの闘争を指導する労働官僚にゆらいするのだ。

一九二九年の大恐慌が私有財産にもとずく資本主義の破産を露呈していらい、たえず中間階級にぞくする知識人たちは、従来のように土着の中間階級と協力することなく、たとえば蔣介石のように帝国主義と結びついている土着の私的資本家たちに反対して、農民を指導し統制するために都市をすてた。

農民を指導ないし誘導するために知識人たちが農村に下向してくるのはあるいはパリのカフェーのテーブルからかもしれないし、あるいはそのさいに最大の個人的な犠牲をともなうものかもしれない。だが、知識人が「自然に」（つまり彼が公然と支配階級として指命されたソ連の場合のように反革命を通じて）そうした地位につかないところでは、彼は、農村や工場で国家計画の代表者となるために、彼個人にとつて必要な一切の仕事を喜んですつかり犠牲にしようとしているのだ。

現在のような国家資本主義の時代に、中間階級の知識人が、世界的な現象として、「個人主義」を「集団主義」にかえたことは、さけがたい事実なのだ。そしてこの新知識人は「集団主義」という言葉で、国有財産や国家行政や国家計画のことを考えているのだ。

戦後数年にわたつて、こうした知識人の動きは、イスラエルの「社会主義的」労働組合（これは同時に最大の工場所有者だ）から、アラブ民族主義国の名前のもとでイスラエルと闘つた青年将校たちにいたるまで、いたるところでさかんにひきおこされた。それは、いま、イラクでは、ナセルの民族主義に挑戦する土着型の共産主義的民族主義としてあらわれている。

後進国でも先進国でも、知識人の官僚は、プロレタリ

ア革命に反対する労働官僚のかたい同盟者だ。彼の仕務は、農民の反乱あるいはなんらかの人民の反乱を抑制し彼らの自己発展を阻止することだ。

こうした一切の知識人の原型ないし救師は、もちろんかつてマルクス主義的革命家だつた、中国の支配者毛沢東だ。一九二五年から二七年にわたる中国革命のなかで毛沢東は農民のもつ革命の潜在力を発見した。大革命が都市で敗北を喫したとき、毛は、農民の反乱は、それが中心部すなわち政府の所在地から非常にはなれているために、継続することができるだろうということを発見した。彼以前の一切の他のマルクス主義的革命家たちが、革命が敗北したとさやつたことと反対に、毛は監獄や亡命にむかわないで、ゲリラの戦士になるために広大な山獄地帯に入りこんだ。

毛が、もはや彼につき従う大衆をもつていなかつたにもかかわらず、新たにやつたこと—そしてこのことはたんに自衛行為のように思われたのだが—は彼につき従う農民たちをも山賊たちをも排除しないで軍隊にかえることだつた。まるで督軍のように、彼は、蔣介石の無慈悲な攻撃によつて強制された、あの有名な六〇〇〇マイルに上る長征であろうと、あるいは必需品を求めて行つたちよつとした村落への手入れであろうとをとわず、この軍隊の訓練と行動を維持することに心をくばつた。

さて、第二の特徴は第一の特徴から生じた。つき従う大衆をもたず、指導者原理にしたがうようにゆがめられた原則をいだいて、党は、この当時からたえず権力によつていた。だが、権力は、突嗟には大衆運動なしには獲得されることはできない。そして、こうした大衆運動を確立するためには、原則が、解放の理論が、つまりマルクス主義が絶対に必要だつた。だが、毛は、どんなに原則一般にたいして忠誠をちかおうとも、特殊的には人民が毛に服従することを確信していた。

誰かがあえてマルクス主義の原則に言及するときには彼らはいつもつぎのような粗野な答をうけとつた。「マルクス主義はどんな病気でもなおすことができると考える人々がいる。われわれは、そうした人々に、教条は牛の糞よりも役にたたぬと告げるべきだ。牛の糞なら肥料としてつかうことができる」と。

第三の特徴—そしてこれが最も重要なのだが—は、中央、つまり国家権力に関する意識である。たとえこうした権力の中心が最初はたんなる幽霊であろうとも、それは戦略的な位置についた権力の形態なのだ。村落の手入れにでかけた一隊は食料その他をもつてそこに帰つてくるし、軍隊は、そこから、あたえられた指令をもつて出発する。党の宣伝家たちは、そこで中央の説明をさぎ、そこに報告をもたらす。すべての人々は、中央を支持するために活動し、これをもりたて、「権力を奪取するための幹部」を成長させる。

毛沢東の軍隊＝党の幹部が都市の労働者にであつたとき、幹部たちは現実の国家権力を手にしていて、労働者

たちは、より一そう厳しく労働しなければならぬことを承認させられた。

「われわれは、一九三一年から三四年までの時期にわが党によつて中小ブルジョアジーにたいしてとられた誤つた政策—つまり、労働条件の非経済的に高い水準の主張や、過度に高い所得税率や……、生産の発展やわが国の経済の繁栄や労資双方の公私の利益をあわせて考慮することをわれわれの目標にするかわりに、いわゆる『勤労者の福祉』といつた近視眼的な一面的な見解を目標にすること—の再現を決してゆるしてはならない」。

権力のための闘争は、土地の没収が決して高利貸的な税金の軽減以上を意味しないことを要求するかもしれぬし、あるいはまた土地の没収がまつすぐに「人民公社」につさすすむことを意味するかもしれぬ。だが、とにかくどんな場合にも、どんな時にも、指導者は指導し、大衆は勤労に服する。そして、たとえば一九五八年の十二月の場合のように「行きすぎ」が停止されるときには、つぎのような「毛沢東思想」が支配するのだ。「ひとは一日に八時間はねむられねばならぬ。そして一日に十二時間以上働いてはならぬ」。

現代の国家資本主義時代には、工業化の過程が速かろうと遅かろうと、全体主義的な国家の支配者のいだく見通しは、権力をにぎつているといないとにかかわらず、知識人の官僚の低い層まで浸透している。これが、なぜジョージ・パットモアが毛の「政治的天才」をあれほど賞讃したかの理由なのだ。彼は、指導者の間にその地位を確保していたから、兵営労働をみてもおどろきはしなかつた。彼は、得意になつて牛の糞はマルクス主義の「教条」よりも役に立つという毛の言葉を引用した。これが、彼が、彼のいわゆる「教条主義的マルクス主義」—つまり無原則的な日和見主義にたいする一切の原則的な反対者と闘う方法なのだ。

「社会主義は少数者すなわち党によつてもたらされることはできない」

マルクス主義がマルクスの時代にラッサールによつて代表された国家社会主義に反対しながら発展したようにレーニン時代のマルクス主義は、労働者の権力にたいするどんなにわずかな制限にたいしても、これと全面的に反対しながら発展をとげた。

レーニンは、プロレタリア革命を特徴づけるものである、古い国家機関を粉砕するという原則は、決してプロレタリア革命を他の革命から区別するものではないとまで言明するにいたつた。「狂気になつたブチ・ブルジョアジーでも、それだけのことはしようとのぞむかもしれない国」。

社会主義革命を他の革命から区別したものは、それが達成された方法—つまりそれが下から達成されたという

ことだつた。「われわれはただひとつの道—つまり下からの変革しかみとめない。われわれは労働者自身が下から経済的諸条件に関する新しい原則をつくりあげることをのぞんだ[四]」。

古い国家機関は一九一七年の一〇月から一九一八年二月までの間に粉砕されたのだが、これは革命の仕事のなかで一番容易な部分だつた。困難な仕事、つまり決定的な仕事はこれにつづいた。レーニンはつぎのようにのべた。全人民は「一人のこらず」国家を統治し、経済を管理せねばならぬ。そして、そのためには、「都市と農村の間の差別、とともに肉体労働者と頭脳労働者の間の差別を廃止することが必要なのだ[四]」。

右にレーニンがのべたことが真の共産主義の目標だという証拠は、真の共産主義の方式が、カウツキーやメンシェヴィーキや社会革命党員や彼らの愛するベルンの「兄弟たち」（一九一九年二月に、第二インターを復活させることを目的としてベルンにひらかれた会議に集つた社会民主主義者たちのこと）のもつたいぶつた、複雑な表現を用いる美辞麗句とちがうところは、後者が一切を労働条件に還元した点にあつた[四]という事実のなかにみられる。

そこで、もし共産党が、官僚化されないで、大衆のみが強力でなしうることを共産党は彼らにかわつてなしうるのだと考えはじめたりしないならば、そのとき、—そしてそのときはじめて、人民は社会主義の方にむかつてくることができるのだ。

「すべての市民は一人のこらず、裁判官として活動し、国の政府に参加せねばならぬ。そしてわれわれにとつて最も重要なことは、一切の勤労者を一人のこらず国家統治に参加させることだ。これは極めて困難な仕事だ。だが、社会主義を少数者によつてつまり党によつて導入することはできない[四]」。

この言葉は、たんに党の外部の人々にきかせるために語られたのではなく、党大会の出席者にむかつて語られたのだ。さらに、この言葉は、権力への途上にある人物によつて語られたのではなく、権力を握つている人物によつて、党は、その綱領を改定するにさいして、どうしてなぜ党が権力をかちとつたかということを決して忘れるべきではないことを強調するために、語られたのだ。彼は、権力をにぎつた党はまだわずかに階級のうちの少数者にすぎないが、社会主義は「数千万の人民がいかにして独力で一切の仕事を遂行すべきかということを学んだとき、彼らによつてはじめて導入されることができるのだ」（「ロシア共産党第七回大会への報告」邦訳三巻選集（六）八八一頁）ということを強調するために語つたのだ。

二年後に植民地革命が歴史の舞台に突如としてあらわれたとき、レーニンをして、こうした革命を彼の理論の新しい出発点たらしめたのは、まさにこうした類いの見透しだつたのだ。

理論の新しい出発点
—帝国主義下の植民地革命

「われわれは、現在解放をかちとりつつある後進諸民族にとつて、国民経済発展の資本主義的段階が不可避だという主張を正しいものとしてみとめることができるだろうか？」（「コミンテルン民族植民地問題小委員会への報告」邦訳レーニン三巻選集（八）六八二頁）レーニンは右のように尋ね、ついで民族問題と植民地問題に関する小委員会の名前でハッキリとつぎのように答えた。

「われわれは、この問いにたいして否定的に答えねばならぬ。…われわれは…先進諸国のプロレタリアートの援助によつて、後進諸国はソビエトにいたり、そして発展の一定の段階を経たのち、資本主義的な発展段階をとおらずに共産主義にいたることができるだろうという命題にたいして理論的根拠をあたえねばならぬ[四]」。

こうした従来のべていた主張をゆるがせる痕跡が、彼自身の国のナロードニキ、すなわちロシアは資本主義的な発展段階をとびこえることができると主張していた人物の口からのべられたということは、いくら強調しても強調しすぎることはない。

今日、ネールが、インドはパンチユヤート（村落評議会）を通じて直接に社会主義にすすむことができると考えているのと全く同様に、ナロードニキは、ロシアはミール（村落共同体）を通じて直接に社会主義にすすむことができると考えていた。レーニンは、彼らとはげしく争いこの理論闘争にうち勝つたのだつた。たしかに歴史は彼の判断を支持した。

きわめて根本的で客観的なものだけしかレーニンの考えのなかにこうした完全な変更をもたらすことはできなかつただろう。実際、世界を震撼させる二つの事件こそがこうした変更をもたらしたのだつた。第一に、一九一七年の革命は、ロシアよりも技術的に一そうおくれている国を助けにくることのできる労働者国家を樹立していた。第二には、植民地革命自身が帝国主義時代の農民の革命的な役割をあきらかにしていたのだ。

一九一六年の復活祭週間に勃発したアイルランドの蜂起いらい、レーニンに、必ずしもすべてのインテリゲンチャがあらゆる時期に労働者階級だけから発するものではないということを強調させたのは、資本主義の帝国主義的発展の現段階と民族革命の特殊段階とに関する右のような知識だつた。彼は、プロレタリアートが史上最大の革命、すなわちロシアにおける十月革命を遂成したときにもこうした立場をかえなかつた。いや、この革命はかえつて、独立を求めて闘いつつある小民族が社会主義革命の力をときはなつことができるように、革命を達成しつつある工業国の労働者階級は低開発諸国を援助して資本主義的な工業化を回避させることができるという、歴史の弁証法の真理を強調したのだつた。

こうした理論の新しい出発点—資本主義なき工業化—は、もちろん、先進諸国の労働者階級は、低開発国の兄弟たちを助けにくることができるし、またくるだろうという前提の上にたつていた。

コミンテルンの歴史にかきとどめられた、こうした貢は、たんにスターリンによつて抹殺されたはかりでなく、トロツキーによつても抹殺されてしまつた。つまり、スターリンの政策は一九二五年から二七年までつづいた中国革命を破滅させたし、トロツキーは永続革命の理論を復活させるためにまさにこの時期をえらんだのだつた。

永続革命、つまりブルジョア革命の段階でストップすることなくプロレタリア革命ないし社会主義革命の段階まで継続する革命という考えは、一八四八年のヨーロッパ各国の革命からひきだされた教訓として、カール・マルクスによつて最初に展開された。そして一九〇三年から六年までにわたる時期に、トロツキーはこの理論を、一九〇五年および一九一七年のロシア革命を分析し、これを先取りする理論として発展させたのだ。一般には、永続革命はたんに世界革命と同じ意味の言葉になつたが、トロツキーは一九三〇年に、永続革命についての彼の考えは、「永続革命の理論は、後進国にとつて、民主主義への道はプロレタリア独裁を通じて到達されるという事実を確立したものだ[1]」ということを強調した。

ちようど国家資本主義時代が農民ならびに民族革命に関するレーニンの分析の正しさを証めていた時、トロツキーはこれまでよりも一そうつよく、彼の理論を、中国の農民反乱はプロレタリアートの闘争の残存物以外の何ものでもなく、プロレタリアートの側から新しい動激があたえられた後はじめて再び勃興するだろうという内容でかざつたのだつた。

トロツキーによれば、第一に、ツアール・ロシアでは社会主義革命が成功する可能性は、農民を指導する労働者階級の力に左右されるものと考えられていた。ついでその後、労働者階級とは、プロレタリアートを指導する党を意味することになり、最後に、それは、労働組合をすつかりのみこむ労働者の国家機関の問題になつた。レーニンが「遺書」のなかで、トロツキーの「行政的心理」にたいして闘わねばならなかつた理由は、まさにこの点にあつた。結局のところ、ロシアにおける発展についての輝かしい予言としてはぐまつたものは、彼の晩年には中国に現実に発展しつつあるものに目をふれないでおくために必要な目かくしにすぎぬものとなつた。

現代中国の光にてらされた、トロツキーの永続革命論

農民の役割に関する評価についてのトロツキー自身の言葉は、「農民を過少評価している」という、スターリニストの彼にたいするどんな非難よりもはるかにハツキリとこのことを語つている。毛沢東は、彼が一九二七年

にかいた湖南省の農民運動に関する報告書のなかでは、農民の反乱のなかに貧しいものをつかんでいたのだが、トロツキーはこうした農民運動のなかの新しいものを無視する点では、スターリンと一致していた。

一九三〇年に、彼がロシア革命という主題にたちかえつたとき、彼はつぎのように書いた。「全体としての農民たちがいま一度—彼らの歴史上ではこれが最後の時期だつたが—革命的な要素として行動することができることを知つたという事実は、同時にこの国における資本主義的諸関係の弱さと農民たちの強さを証明する[2]」と。

彼がレーニンについて、「ロシアの農民運動の真の歴史的意義をこのようにハツキリと示したことは、レーニンがはたした最大の貢献のひとつだつた[3]」とかいた事実があるにもかかわらず、右のような判断が彼によつて下されたのだ。

トロツキーは、農業問題については、レーニンの生徒であり、信奉者であると主張した。一九二五年から二七年にいたる革命から一一年を経た一九三八年に、彼が農民は社会主義的意識はもちろん民族的意識するもたないとつぎのようにのべたとき、ひとは彼が一体レーニンから何を学び、こうして学んだ教訓が彼を一体どこへ導いたのだろうかと質問せねばなるまい。「数の上では最も多く、最もアトム化され遅れていて、最も抑圧されている階級である農民は、地方的な蜂起やパルチザン闘争はできるが、こうした闘争が全国民的な水準までたかめられるためには、一そう進んだ集中化された階級によつて指導される必要がある[4]」。

一九四〇年にかかれた彼の最後の著作のなかで、彼は倦むところなく、ロシア革命と永続革命に関する彼の考えをくりかえした。「農民は独力では、自己自身の利益をハツキリと定式化することさえできなかつた。…わたしは、たえずくりかえして、永続革命の理論を発展させこれを基礎づける仕事にかえつていつた。農民は全く独立した政治的役割をひきうけることはできない[5]」。

帝国主義と国家資本主義の時代の現実からこれほど遠くはなれさつた理論は、それ自身のもつ空虚さによつて崩壊せねばならなかつた。今日のトロツキストたちがトロツキーの永続革命論と毛沢東の「人民公社」の双方にかけて誓うことができるという事実は、力なき抽象と行政的心理とは、権威をつきくずすためには、強大な大衆反乱に身をゆだねるよりも、むしろ何らかの国家権力にしがみつくだろうということを示すにすぎない。

私たちは、こうした考えが植民地革命の勃興にたいして私たちを盲目にすることをゆるしてはならない。私たちの時代が成熟したことは、たとえばエジプトにおける将校の反乱の場合のようにたんなる宮廷革命でさえも、ある程度の土地改革を行い「革命的な変革[6]」を約束するためには、農民大衆や学生の革命的蜂起によつて推進されねばならなかつたという事実のなかにみられる。

問題の要点は、経済状勢—つまり資本主義の世界的段

階—だけから出発しないで、同時に政治的な成熟度をも考慮して出発することだ。自由のために闘い、そして死んでゆく人民こそは、たんに政治的にはかりでなく、まさしく政治の根底において—つまり人類がいかなる種類の労働を遂行するかを決定するにさいして運命を自己自身の手中ににぎることができるほど十分に成熟している。

オートメーション時代において人類がいかなる種類の労働を遂行すべきかを問おうとするほど十分に前進した人民は、ますます多くの根拠をという答からはなれてしまつた。彼らは、階級的な答こそが人間主義的な答だということを了解している。以下にのこされた仕事は、そうした人間主義的な答とは一体何であるかを語ることだ。

マルクス主義的人間主義

ひとはパンのみで生きるものではない。だが、生きるためにはパンを手に入れねばならない。マルクスの人間的な唯物論は、現在の植民地革命にたいして、直接的な答えと長期間な答えの双方をもつている。

人間主義にたいする現在の共産主義者たちの攻撃は決して偶然ではないし、理論のこまかい点をあげつらうものでもない。こうした攻撃は、以上にあげた民族革命の運動が労働者階級の運動とともに、国家資本主義の死の把握から身をときはなしてたち上るかどうかという問題におとらぬ、基本的な問題に関連している。

私たちは、スターリンがマルクスの価値論を修正することにきめたのは、英雄的なソ連人民がナチの侵略者たちを駆逐しつつあつた、第二次大戦のさなかにあたつていたことを知っておく必要がある。外見上ペダンティックにみえる論文『経済学教授上の若干の問題』を発表する年として一九四三年がえらばれたのだが、その理由は、この年はソ連の生産管理者たちがアメリカのヴェルト・コンベーヤーの技術を「発見した」年にあたつていたからだ。この年にこうした論文を発表したことは、ソ連人たちに戦後に労働条件の変更を期待しないようにと告げるスターリン式の方法だつたのだ。

マルクスの搾取の理論は、彼が価値法則を資本主義発展の法則として分析した成果の上にたてられているのだから、ソ連の理論家たちも、一九四三年までは、彼らの国—いわゆる無階級社会における価値法則の作用を否定していた。マルクス主義の修正は、価値法則がソ連で作用していることをみとめると同時に、しかもソ連が「社会主義国」であると主張することを可能にするために必要だつたのだ。こうした修正は、教師たちに経済学を教授する場合マルクスの『資本論』の構成に従わないようにと要求する形をとつた。

私が『マルクス主義と自由』のなかでかいたように、「マルクス主義は解放の理論いがいのなにものでもない。マルクスは人類の自由と、資本主義の発展の絶対的一般的な法則である人間の生命の不可避的な浪費とに、つよい関心をいだいていたのだが、ソ連の「共産主義」は、資本主義の主要な成果—すなわち労働者には最小限度を支払い、後からは最大限度を搾取すること—の上にあぐらをかいている。そして彼らは、これに『計画』という尊称をさずけているのだ。だが、マルクスはこれを価値ならびに剰余価値の法則となづけた」。（邦訳『線外と革命』八頁）

一九四三年に行われた、価値に関するマルクス主義的な分析との袂別がソ連労働者にたいする搾取の継続を意味したのと同様に、一九五五年から五六年にかけて—とくにハンガリーで—行われたマルクス主義のもつ人間主義にたいする攻撃は、ソ連の共産主義者たちが東欧にたいする帝国主義的な支配を継続し、経済援助によつて植民地世界にあらたに介入することを意味した。

一部には、ソ連の共産主義者たちの「援助」はアメリカ帝国主義のポイント・フォア計画の援助とはちがうと考える人たちがいる。私たちが見てきたように、さらにその他の人々は、共産主義をストップさせるために全く絶望的になつて「キリスト教的倫理主義」を売りこもうとしているので、彼らは、核開発諸国の開発にはアメリカの国民所得のわずか一%しか必要ではないと主張している。だが、真実のところ、ソ連の国家資本主義もアメリカや「その富裕な同盟者」（西ドイツのクルップ帝国の富をもふくめて）の利潤も、決して、永久に世界経済を再建しはしないだろう。

世界経済は、たんなる機械の建設や私的ないし国家的な利潤とはちがつた起動力によつて運転される全面的に新しい基礎をもたねばならない。ただ、質的にちがつた種類の労働、つまり民衆の創造的エネルギーの解放から生ずる労働だけが、世界を新しい人間的な基礎の上に再建することができるのだ。

だが、私たちは現在、原子時代のなかで生活している。原子エネルギーとオートメ化された機械とは、産業全体の発展を、これとくらべれば微弱にのべられている奇蹟でさえ貧しい想像の素材となつてしまうほど高度におしすすめることができた。これはユートピアでもないし明日でもない。技術的にはこれはまさに今日なのだ。

原子エネルギーを燃料とする動力工場はすでに作業をはじめている。ソ連は人里はなれた不毛の地域で湖水を爆破する計画をもつていると主張している。アメリカの大企業の仲間たちは、ただ一箇の原爆によつて北アラスカの巨大な港湾を爆破する計画がすすめられているといつている。

だが、たとえ原子エネルギーがサハラ砂漠やゴビ砂漠の中に人造湖をつくり、現在のかんばつ地に雨がふるように山を移動させるために利用されるとしても、—たとえこうした企てが空想家の夢ではなく、今日技術的に可能なことであるとしても、それにもかかわらず、私的資本主義であると国家資本主義であるとをとわず、資本主義にとつて、こうした企てを実現することが現在もしく

は近い将来にできるだろうと想像することは、最も馬鹿げたことだろう。

資本主義は、低開発諸国のためにそうしたことを企てないばかりでなく、自己自身のためにもそうしたことを企てることはできない。ピロードのように快適な「生産費にあらかじめ一定の利潤をプラスする」契約を要求するアメリカの民間の株式会社と同様に、ソルシチョフのロシアは、いわゆる「宇宙開発」のためではなく、大陸間弾道ミサイルの生産のためのロケットの開発に数十億ドルを支出せねばならぬ。世界資本主義の両極は、科学を強制して、これを核戦争、すなわち私たちが知っているように文明の終焉を招くに十分な戦争、のために働かせることに忙しい。

「科学を強制する」という表現によって、私は、現在階級社会で形成されているような科学自身が現在とはちがった方法で働くことを切望している、といおうと思っているのではない。はるか以前に、マルクスも、こうしたことを予見していた。すなわち、一八四四年に、彼はつぎのように書いた。「生活のために一つの基礎をもつということは本来ひとつの虚偽なのである」（マルクス『経済学哲学草稿』城塚・田中訳、岩波文庫版一四三頁）と。

マルクスは近代科学の発小路を予見していた。それは、彼が予言者だったからではなく、彼が人間を一切の人間の尺度とし、それゆえ一切の階級分裂の根底に、肉体的なものと精神的なもの、科学と生活自体の間の分裂が存在することを見てとったからだ。

もし、こうした根底的な分裂の結果搾取にもとづく社会以外のなにものかが生れることができると考えている者がいまでもいるとするならば、彼らにいま一度ソ連とアメリカとを眺めさせ、科学がこの両国をどこへ導いていったかを見てもらおう。

資本主義社会に浸透し、一切のものにその反対物をあたえる二重性は、オートメーション—つまり人間の労働の生産力をたかめるかわりに、労働者を過重な労働にかりたてるとともに彼を職場からなげだすもの、にみちびいた。原子の分裂からは、決して地上最大のエネルギー源は生れず、地上最大の破壊の兵器が生れた。

分別のある科学者は、中間階級にぞくしているにもかかわらず、現在こうした状況をみぬくことができる。腥が最初に爆弾を投下しようとも、「われわれは全面的な絶滅から半時間の距離にある」とのべたのは、クイリアム・ピカリング博士だった。彼はつづけてつぎのようにのべた。科学者たちは協力で助力することができないから、われわれは、人生にたいするまったくちがったアプローチを、「人間の心臓と精神から生れる新しい統一する原理」を発見せねばならない、と。

こうした統一する原理は、マルクス主義的人間主義いがいの何ものでもありえない。それは、同時に低開発国の大衆と先進国の民衆との統一点なのだ。

「連が人間主義に基づく戦争に従事しているのは、まさにこうした理由のためだ。ソ連の専制者たちにたいする反逆の風波は、なにものにも妥協することなく、たえずやむことなく流れている。物質国では、こうした反逆の風波はソ連の専制者に全く休息するひまをあたえていない。

こうした反逆は、共産主義者の隊伍の内部にさえも反映された。こうして、一九五五年から五六年にかけて、ハンガリー共産党中央委員会から追放されたイムレ・ナジがしたためた一書簡のなかで、彼は中央委員会にたいして次のように断言した。すなわち、もし大衆が人間主義の方にむかうなら、それは彼らが「資本主義へ帰ることをのぞんでいる」からではない。「……彼らは、労働する人民が祖国と彼ら自身の運命の主人公であり、人間が尊敬され、社会的・政治的生活が人間主義の精神と結びつけられている、人民の民主主義をのぞんでいるのだ」と。

ペトフイ・サークル（一九五六年のハンガリー革命の先頭にたつた作家集団のこと）のなかで、ハンガリー共産主義作家ティボール・デリーは、一九五六年六月一九日に、つぎのように声明した。「われわれは非常に多くのものの為に闘つてきたので、最も大切なもの、つまり人間主義のことを忘れてしまつた」と。だが支配者の地位についていた官僚たちは、こうした官僚に耳を傾けようとはしなかつた。なぜなら、とくに、人間主義は「工場の内部における自主的な管理と労働者の民主主義を採用すること」を意味するものと解釈されたからだ。

全世界の人々が知っているように、人間主義者の闘いの次の段階は、理論ではなくて行動—すなわちハンガリー革命だったのだ。

無慈悲きわまる全体主義機構は、ハンガリー革命を粉砕したのだが、この事件は、その後ビルマやインドやマラヤに遊山旅行にでかけてそれらの国の人々にむかって植民地主義からの解放についてしゃべったのも、最近崩壊したフルシチョフとブルガーニンの顔をそれほど滑稽にほころばせはしなかつた。

ソ連の共産主義者たちが一切の人間主義者に鉄いかつたのはまさにこの時だった。『コムニスト』誌（一九五七年第五号）は、レーニン主義は「どんな種類の『人間主義化』をも、また『人間主義的社会主義』の主張者によつて提起されるどんな改革をも必要としない」という方針をうちだした。この当時までに、支配者の地位についていたポーランドの共産主義者の官僚たちは、すでにこうした「方針」を承認しており、攻撃は一切の「修正主義者」にたいして開始された。政治局員のイエジ・ミロウスキは、作家会議の前夜にあたつてつぎのようにのべた。「一切の修正主義者たちは、自分たちを前進的マルクス主義者としてえがいている。だが、マルクス主義はただひとつしかない。そして、それは党を導くマルクス主義だ」。

ポーランド共産党の攻撃は、まさにそうしたものにならざるをえなかつた。なぜなら、人間主義が勃興し、ハンガリー事件にインスピレーションをふきこんだのはまさにポーランドだつたから。ポーランド人自身は革命の一歩手前にとどまつたけれど、彼らはハンガリーの危機ののち原則に立脚しようとする若干の試みを行つた。こうして、一九五七年四月二八日の『ノヴァ・クルトウーラ』誌はつぎのようにのべた。

「共産主義の理想は、社会の全領域における疎外から人類を—そして社会のワクの内部にいる個人を、解放することを要求している。その目標は、大衆の真の主権を獲得し、自由をうばわれている人々と人民にたいして責任をとらない支配者のグループの間の分裂を一掃することだ。共産主義—すなわち生活の中に投ぜられた人間主義の理念は、普遍的である」。

一九五九年までには、鉄のカーテンはかたくとざされ、ポーランド共産党の第三回党大会は、その決議のかなりの多くの部分を、「インチキな左翼的言辞でかこいながら修正主義者たち」に反対する方向にむけた。「…そしてこうした左翼的言辞は、多くの正直だがイデオロギー的には弱い同志たちも、教条主義者たちの列におしやつた。これらの教条主義者たちはデマにみちたおしやべりの助けをかりて、マルクス主義と共産主義との唯一の公認された擁護者としてたちあらわれたのだ」。

ソ連共産党の第二一回大会（一九五九年二月六日）の最終日に、「全ソ連政治的ならびに科学的知識普及協会の理事長」といつたいかめしい肩書をもつた、党の官僚部のM・B・ミーチンは、私たちにむかつて、もし私たちが真の（！）人間主義を探究しつつあるものとすれば私たちは一体どこに目を注ぐべきかについて語つた。

「マルクス・レーニン主義的社会主義的人間主義という壮大で高貴な考えは」まさにフルシチョフの報告のなかにあつた由！「もし諸君が彼らをやつつけることができないならば、彼らと手をつなげ！」という規則は維持されたように見えた。彼の偽善は、つぎにのべる他のなかにハッキリと示された。ミーチンは一切の「修正主義者」を、—そしてとくに「ユーゴ修正主義」を攻撃した。

「彼らが主張するように、ソヴエト国家の発展は『官僚主義的な統計的な傾向』を意味するとか、社会主義国家が社会主義と共産主義とを建設する場合に決定的な役割を演ずる原則は『マルクス主義のプラグマティックな統計的な修正』いがいのなにものでもないとか、中傷的に主張することは、もしそれが背教でなく、レーニン主義からの完全な退却でないとするならば、そもそも何であろうか！」

だが、こうした演説がソ連の共産主義者たちの間の生硬な神経に打撃をあたえた理由は、それが傾向的であろうとなかろうと、理論のせいではなく、チトーが新しいアフリカやアジア諸国の重要性をしつているからだ。彼は

は「中立」諸国の面を熱く歓待しておいた。しかも、ソ連の政治をパロするためにそうしておいたのだ。

ここで問題となるのは、チトーがソ連のかわりに何を提出しているかということだ。国家資本主義が自己を「共産主義」となつけようとなづけまいと、国家資本主義は私的資本主義より多くの売りものをもつてはいない。両者ともたたちに自由にいたる道を見出そうとしている。新しい力をストップさせようと試みている。

アフリカ革命の指導者たちは、プロレタリアであれ、農民であれ、未開人であれ、とにかく大衆の創造的なエネルギーだけにたよつてはいない。それは、彼らが「教条主義的なマルクス主義」から独立しているからではなく、彼らが工業化への資本主義的な途にたよつているからだ。

もちろん、低開発諸国は、援助を必要とする。なにより もまず、彼らは水を欲している。だが、経済が労働者管理のもとにおかれていないところでは、—そして現在ではこうした状態におかれていないところはどこにもないが—援助はきわめて貧しく、援助をうけとる国をたえず核戦争のことばかりを考えている権力機構のひとつにまきこもうとするひもつきのものとなるだろう。

自由のための彼らの闘争を先進国の民衆の闘争と統一する原則を発見することなしには道はない。汎アフリカ主義を通ずる道には中道はないし、中国の人民公社を通ずる道は自由にいたる近道ではなく、全体主義的な国家資本主義にいたる道である。

全世界にわたる大衆の統一闘争によるほかには逃げ道がないという非実は、決して、植民地ないし半植民地諸国が「不可避的に」資本主義的な発展をたどることを非難するものではない。

自己の自由のために闘うにいたるまで十分に成熟した人民は、自己自身の社会を再建する事業のなかで運命を自己の手中に握るまで十分成熟している。マルクス主義者の用いる常套語は、ほかの一切の常套語と同様によろしくない。そして、語るにたりるほどの労働者階級をもつていない人民にたいして、「ただプロレタリア革命がおこりさえすれば…」等々と告げることは、全く誤つた種類の常套語なのだ。

レーニンの理論上での新しい発展はまさにここにあつた。革命のイニシアティーヴは、必ずしもつねに労働者階級のもとにあるのではない。レーニンは、孫逸仙の時代に、ベルリンにいたる道は北京を通ずるかもしれぬといつた。世界の人口の圧倒的多数は東洋に住んでいる。そして、私たちは、植民地革命の新しい偉大な力を理論上での新しい出発点としてつかまねばならない。

これはもはや理論ではなく事実なのだ。こうした事実を無視することは、歴史から私たち自身をよみおとすことだ。そうしたことの証明は、理論上でも実際上でも人間主義的な形態をとつてきた、共産主義的全体主義にたいする反対のなかに横たわつている。同じことは、西欧

帝国主義に反対するアジア・アフリカの革命についても真実だ。さらにまた、同じことは、技術的に進歩した国々における労働者運動のなかでも真実だ。解放運動はいたるところで、国際的な性格をもつている。日本における大規模なデモンストレーションは、アイゼンハワーと岸の両者に反対することを目的としていた。ルムンバ殺害に反対する抗議は世界的なひろがりをもつていた。キューバ革命にたいする支持も同様に世界的だつた。ベルギーの労働者の国王への服従拒否、坐りこみによつて人種的差別待遇を阻止しようとするアメリカの青年たちの決意、核武装解除闘争のためのオルダーマストン行進のなかに集結された反戦感情—昨日と今日表明されたこうした一切の行動は、明日はもつとふかまるだろう。こうした行動は、従来と異つた政治—すなわち新しい世界秩序にたいするよびかけの声をひびかせている。

人類は決して無為に坐して、自分自身が破滅させられることを黙視しはしないだろう。

註

[一]「汎アフリカ主義か共産主義か—来るべきアフリカのための闘い」ジョージ・パッドモア

[二] J・R・ジョンソンの「現実に直面して」七七頁。私は、マルクスとレーニンとガンジーとを結びつけることはおどろくべき放れ業だということをみとめる。だが、ソビエト・ヨーロッパ合衆国や、ソビエト・アジア合衆国や、世界革命や、官僚制「そのもの」に反対する闘争や、大衆の自己動員のために、社会を全面的に新しい出発点の上に再建するための新しい情熱や力のためにあれほど呼号するJ・R・ジョンソンのようなパンフレット作家が、結局新しきものの代表者としてエンクルマに到達したことはむしろいささか哀れをもよおさせる。わたしにとつては、ハムレットとともに「おゝ、哀れなヨーリックよ、私は彼を知つていた」とでもいう他にはつけ加えるべきものはなにもない。

[三] エンクルマの自伝『ガーナ』につけ加えて、読者は、「アフリカ人の独立と主権」に関する討論をのせている『ウエスターン・ワールド』誌の一九五八年十月号のなかで彼ならびにレオポルド・センゴールのようなアフリカの指導者たちのいだく原則を手つとりはやく検討することができる。

[四] この点に関する美邪な包括的な叙述はヨゼフ・S・バーリナーの『ソ連の経済援助』の中でよむことができる。

[五]『資本論』第三巻四六八頁ケア版、一九一五年（向坂訳『資本論』（十）一一〇頁）

私の著書『マルクス主義と自由』（邦訳『疎外と革命』）の「資本主義の崩壊—恐慌、人間的自由ならびに『資本論』第三巻」の節を参照されたい。ここ

と同様に、[illegible]

[六] 最も興味深い解釈と事実上の証拠とが、ユーゴースラビアの新聞紙上にあらわれている。ユーゴーの日刊紙や週間誌や月刊紙上では「人民公社」のことが報道された。『ニュー・リーダー』（一九五九年七月一五日号）はこの問題についての特別附録をだしている。

[七] ガマール・ナセルの『民族主義の哲学』をみよ。

[八] 毛沢東「現在の状勢とわれわれの任務」一九四七年一二月二五日（『毛沢東戦後著作集』二二頁）ジョン・R・カウツキーの『モスクワと共産党』にも引用されている。

[九] レーニン、『選集』第七巻三三七頁（インターナショナル・パブリシャーズ版）。

[一〇] 前掲書二七七頁（「労働者・兵士・農民代表ソヴエト第三回全ロシア大会における報告」邦訳レーニン三巻選集（六）七八七頁）

[一一] レーニン、『選集』第九巻四三三頁

[一二] 前掲書四三九頁

[一三] レーニン、『選集』第八巻三二〇頁（「ロシア共産党第七回大会への報告」邦訳レーニン三巻選集（六）八八一頁）。

[一四] レーニン、『選集』第十巻二四三頁（「コミンテルン民族植民地問題小委員会への報告」邦訳レーニン三巻選集（八）六八三頁）。

(27)前掲書二四二頁（前掲邦訳書六八二頁）。

(28)原書には脚注がのせてないから、引用論文は不明だが、ほとんどこれと同様な文章は『永続革命論』第十章　永続革命とは何か？―諸本テーゼ中にある。（『トロツキー選集』第五巻三〇九頁、現代思潮社版）。

(29)毛沢東『湖南農民運動視察報告』（一九二七年二月）（毛沢東選集第一巻、三一新書版）はコンラッド・ブラント、ベンジャミン・シュウオルツ、ジョン・K・フェアバンクの『中国共産主義のドキュメント史』のなかにみられる。

(30)レオン・トロツキー『ロシア革命史』第一巻四〇七頁（山西訳『ロシア革命史』（二）角川文庫版二四六―七頁）。

(31)前掲書四〇八頁（前掲訳書二四八頁）。

(32)ハロルド・R・アイザックスの『中国革命の悲劇』によせたレオン・トロツキーの序文。

(33)レオン・トロツキー『スターリン』附録三「ロシア革命についての考え」四二五頁。

(34)子・ゑ・S・ラクーチュール、『転換期にあるエジプト。

(35)この論文は最初は、『マルクス主義の旗のもとに』の一九四三年七、八号に発表された。それは私によつて翻訳され、『マルクス経済学の新修正』と題するコメントをつけて『アメリカン・エコノミック・レヴュー』（一九四四年九月号）に発表された。この論文は同誌上でまる一年つづいた論争をひきおこしたが、この論争の最後に私は『マルクス主義の修正か再確認か？』と題する回答をたずさえて再び同誌に登場した。この論争と一九五五年に行われたマルクスの人間主義の修正に関する論争は、私の『マルクス主義と自由』の中に詳しくのべられている。（『マルクス経済学の新修正』および『マルクス主義の修正か再確認か？』の二論文は長崎造船社研訳『ソ連経済と価値法則』に収められている）。

(36)『哲学の諸問題』（一九五五年）参照。ただしロシア語版でしか手に入らない。この論争が理論的な領域から東欧の革命を攻撃し、これを弾圧するという実践の領域に移されたとき、その文献はポーランドやハンガリーの雑誌の誌上では十分に紹介された。この文献の多くは、それいらい英語版でも入手されることになった。

(37)『共産主義に関するイムレ・ナジの見解』中の「新路線を防衛して」四九頁（邦訳あり）。

(38)ポーランドの出版物をフォローできない人々は、『東ヨーロッパ』誌のなかに多くの翻訳を見ることができる。イエジ・ロウスキの報告は同誌一九五九年二月号にのせられている。

(39)『東ヨーロッパ』一九五九年五月号ならびに六月号

(40)『プラウダ』一九五九年二月六日号。この文章は

「ソ連の新聞のカレントなダイジェスト」誌の一九五九年六月三日号に翻訳されている。この『ダイジェスト』は、一般に、英語を話す国民の手に入る最も信頼ある出版物だ。なぜなら、それには公式の共産党の出版物からの翻訳以外はふくまれないから。

(41)このことは、共産主義者はかりでなく、トロツキストをも特徴づけている。『インターナショナル・ソシアリスト・レヴュー』の夏期号と春期号（一九五九年）のなかで、トロツキストたちは、若きマルクスの哲学に関する数々の手稿にたいする攻撃を開始した。『社会主義と人間主義』と題された、これらのもつたいぶつた諸論文は、私たちに、人間主義とは、マルクスが「通過した」一段階だつたと断言している。これらの論文の著者ウイリアム・P・ワードは、これらのマルクスの偉大な作品をあえて「未成熟なマルクス」の産物となづけようとしている。共産主義者たちは、三二年もおくらせたのちついにマルクスが一八四四年にかいた経済学哲学草稿の英語版を、これに若干の気まぐれな脚註をくつつけて発表した。ワードは、この点でも共産主義者と行をともにしているのだろうか？　マルクスが「こうしたものとしての共産主義は人間的発展の目標ではなく、人間的な社会の形態ではない」（城塚・田中訳「『経済学哲学草稿』一四八頁）とかいた箇所に、共産主義者たちは、「『こうしたものとしての共産主義』という言葉のもとに、マルクスは、ここでは粗野な平等主義的な共産主義のことを考えている…」と注釈をつけた。

今日の共産主義者たちをなやましているものは、「平等主義的な共産主義」にたいするマルクスの批判といわれているものではない。彼らの急所をついているのは、マルクスが財産の国有化を強調している点ではなく、彼が個人の自由を強調している点だ。つまり、それは、国家共産主義にたいするつぎのような彼の予言的な警告なのだ。―「われわれは、とくに、社会を抽象物として個人に対立して再建することをさけるべきである。個人こそは社会的本質なのだ」（前掲訳書一三四頁）

附録一、新しい人間主義—アフリカの社会主義

疲労しきつたアメリカの一知識人が冷戦と、アメリカとソ連の間の核戦争の脅威にすつかり洗脳されて「イデオロギーの終焉[一]」をつよく訴えているとき、自己自身の生命さえ犠牲にして自由のために闘つている世界、すなわちアフリカはダイナミックな観念の躍動にみたされていた。レオポルト・セダール・センゴールが、彼のぞくするアフリカ連盟党の立憲会議のために行つた一九五九年六月の報告のなかでのべたように、「歴史との出会いをつづけることを拒絶し、自分が独自な使命の担い手であると信じようとしない民族、—こうした民族はすでにその生命をおえて今にも博物館におさめられようとしているのだ。アフリカの黒人は、出発する前にすでに生命をおえたりはしない。彼をして動らしめよう。いや、なによりも彼をして行動させよう。彼をして、普遍的な文明の建設を助けるために酵母のように、彼のメッセージを世界にとどけさせようではないか[二]」。

アフリカ革命が世界地図をかきかえつつあるとき、白人文明のごう慢さは、たんに支配階級の内部はかりでなく、多くの西欧の社会主義者の間にもみられる。こうして、シドニー・レンスは、あたかもアフリカ人の果した理論的な貢献がトム・ムボヤの「一人一票」からなりたつているもののようにかいている[三]。「一人一票」とは「民主主義的な文明」としてねりあるいている白人支配にたいする革命とほとんど同じものであることをあきらかにしているが、しばらくこのことを除外しておくとしても、こうした知識人たちは、彼らが、アフリカ人の勇気や自由のための闘いへの全面的な献身についてはいわずもがな、少くともアフリカ人の知的把握力だけにでも匹敵するまでには、永い道をあゆまねばならない。

そのスピーチのなかで、センゴールはつぎのようにのべた。「マルクスの積極的な貢献を要約しよう。彼の果した貢献は、人間主義の哲学と、経済理論と、弁証法的な方法なのだ」と。センゴールは、深い理解から生れる平衡さをもつて、社会主義は人間主義的であるとともに一つの方法だと結つた。彼が、「ひらかれた社会主義」あるいは「アフリカ型の社会主義」となづけているものを創造するために、マルクス主義を空想的社会主義ならびに宗教と結びつけることを目標にしているという事実には、主観的な動機がなくはない。だが、このことは、彼が、マルクスの人間主義を、「伝統的なアフリカ文明、

二、この文明が植民地主義やフランス文明に遭遇した結果、三、アフリカの経済的資源や潜在的可能性、ならびにそれらと工業的先進国の経済との必然的な相互依存関係、といつた三重の総合の理論的基礎たらしめようと願つていることを、ほやかすものではない。

マルクスの解放理論はきわめて強力で、分析化させる力だから、中東や極東やアフリカをつらぬいて、仏教やキリスト教や回教などの種々の宗教によつてマルクス主義にいたる橋を見出そうとする種々の試みがなされている。このことは、ちようど共産中国やソ連の例でこれと同様な試みがなされているのと同様だ。だが、ここでは私は、そうした日和見主義がアフリカの知識人をも特徴づけていると主張しているのではない。むしろ、私にとつては、彼らのマルクス主義にたいする批判の一部は、マルクスの思想の一部を形成しなかつた—そして、そうすることは到底できなかつただろう—現在のアフリカの現実のせいだと思われる。だが、センゴールによるマルクス批判のほかの部分、とくに現在の経済に関する批判は、間違つているか、あるいは宗教の場合のようにひどく微妙である。センゴールはつぎのようにかいている。「マルクスの無神論は、キリスト教が歴史的発展のなかでとつた偏向にたいする原始的なキリスト教の反動と考えられることができる」と。

アフリカにおける抑圧はつねに白い顔をかぶつていた。このことはアフリカ人の心に重々しくのしかかつているので、彼らは、たとえ労働者のそれであろうと、一切の白い顔にたいしては反抗しがちである。こうして、センゴールは、つぎのように主張するのだ。すなわち、ヨーロッパの大衆の生活水準は、「アジアやアフリカの大衆の生活水準を犠牲にしてはじめて」上昇した、だから、ヨーロッパのプロレタリアートは、「決して現実に、—わたしは有効にという意味でこういつているのだが—アフリカにおける抑圧には反対しなかつたのだ」と。（傍点はわたしのもの—ラーヤ）　センゴールが彼自身、「現実に」という言葉を「有効に」と解釈せねばならないという事実そのものが、彼が、プロレタリアートの闘争と革命について知つていることを示している。右に彼がのべた事実を、先進諸国のプロレタリアートにではなくこれらの諸国の政府当局に訴える口実として利用することは、今日ではたしかに余りにも容易だ。彼が右にのべた事実が、白人のプロレタリアートはかりでなく北アフリカ（アルゼリア）の革命家たちをも搾取しつつあるドゴールにたいする弁解をもふくんでいるとき、それはたしかに余りにも高い代価だ。ドゴールのフランスにたいするアフリカの関係についての一切の具体的な問題について、センゴールがドゴールの弁護人として現われねばならなかつたという事実は、オートメ化された核時代のなかで自由のために闘いつつある低開発諸国の悲劇をパクロしている。

他方、国民がフランス共同体の一部にとどまることを

あえて拒絶したギニアのセクトーレは、もつと大胆な考えをもつている。

「思想の領域では、ひとは世界の頭脳だ。と主張することができる。だが、一切のできごとが肉体的ならびに精神的な存在に影響を及ぼす現実生活の具体的な水準では、世界はつねに人間の頭脳なのだ。一切の思考する力—つまり発展と完成とのダイナミックなカ—を発見することができるのは世界の中においてであるから、エネルギーの結合が行われ、人間の知的能力の真の性質が発見されうるのもまた世界の中においてである。だから、そうすることによつて彼自身をある程度人間の全体的な社会から排除することなしに、なんらかの思想の学派や、なんらかの思想の種類や、なんらかの人間家族を排除すると誰が主張できるだろうか？」：：

「一切の人間の知識の結果生れた科学はなんらの国籍をもたない。かくかくの発見の起源はどこかといつた笑うべき論争にはわれわれは関心をもたない。なぜなら、そうした論争は、発見の価値に何ものをもつけ加えるものではないから。

だから、アフリカの統一は、本質的に、なんらの人種上および文化上の対立もなく、狭いエゴイズムや特権もなく、人民の間の密接的な団結と協力を基礎にした新しい人間主義を世界に捧げているといわれることができる。このことは、西アフリカの問題をこえ、アフリカ人民のおかれた条件や期待と同様に、高度に発展した諸国を分裂させる争いからはるかにひきはなされている[四]。

私たちは、こうしたアフリカの指導者たちが危機的な一九六〇年代にどうした方向にむかうかを知ることはできない。だが、私たちは、新しい社会を建設するための理論的基礎に関する彼らの真剣な関心が、「西側の」知識人の指導者のなかにはこれに平行するものをもつていないことを知つている。

私たちの時代は「歴史の生誕の時代」であり、思想ならびに革命にたいするアフリカ人たちの貢献は、新しい出発点にたつた社会再建の本質的な一部をなすものだ。

註

[一]ダニエル・ベル『イデオロギーの終焉』ニューヨーク、一九六〇年

[二]レオポルト・セダール・センゴール『アフリカの社会主義』アメリカ・アフリカ文化協会、ニューヨーク、一九五九年

[三]ジドニー・レンス『アフリカの革命』、『リベレーション』一九六〇年一・二・三月号

[四]セク・トーレの演説はアブダレーイエ・ディオップが、彼の『歴史におけるアフリカの道』のなかに挿入している部分からひいた。『アフリカ・サウス』誌一九六〇年四—六月号、ケープタウン参照

[五]G・W・F・ヘーゲル『精神現象学』

附録二、アフリカとアメリカのマルクス主義的人間主義なぜ新しいインターナショナルがないのか？

アフリカとアメリカのマルクス主義的人間主義者たちは、一つのものを共有している。それは、マルクス主義的人間主義の根拠にある固有のものが「他のすべての人人」によつて問題にされていることだ。

第二次世界大戦後の歴史のなかで最も人をエキサイトさせる負をかきしろしたアフリカ革命は、その行動とその哲学への認識の点で、アフリカ社会主義にたいしてアメリカのそれにたいする優越性をあたえた。独立によつて、アフリカにおける社会主義のスポークスマンの見解は「公式のもの」となつた。これに反して、資本主義のアメリカでは、マルクス主義は、—たんに共産主義者によつて変形されたものはかりでなく、マルクスが「徹底した自然主義もしくは人間主義」となずけたオリジナルな形のものでも—「外国の理論」としてあつかわれている。

アフリカ社会主義のマルクス的人間主義にたいする関係についての疑問点は、アメリカにおける場合のように政府当局の原爆戦争に関する騒がしい叫び声にさまたげられてその向うで語られている第二のアメリカの声をきくことがむつかしいという事実には関係がない。むしろ疑問は、アフリカの社会主義者自身の矛盾した陳述から生ずる。私は、決してアメリカの社会主義の声が唯一つだといおうとしているのではない。私の意見はそれとはるかにはなれている。だが、アメリカでは、意見の相違は大声でさけばれ、強調され、過度に強調されている。ところが、アフリカでは、汎アフリカ主義と、独立諸国の間に現在二つのブロックがあるにもかかわらずこれらの国の間に存在していると考えられている統一とを確認するといつたように同時に矛盾した発言が行われているのだ。たとえば、ナイジェリアにおけるヌナムディ、アジキイウエ博士とナイゼリア青年会議、もしくはガーナとナイゼリア、セネガールとギニア、マリとトーゴなどの間のように鋭く分裂してはいるけれど、—それにもかかわらず、すべての人々は、自分たちは汎アフリカ社会主義を擁護するものだと主張している。不幸にして、こうしたことは、汎アフリカ主義が、アフリカ社会主義とは何かということを全然明かにすることなく、敵よりもむしろ味方の混乱を助長していることを意味するにすぎない。

世界的な哲学対支配的イデオロギー

私は、つぎの二つの点で、ピエール・アレクサンドルの「マルクス主義とアフリカの文化的伝統」（『サーヴェイ』誌一九六二年八月）と題する論文に賛成する。

一、「古典的マルクス主義と伝統的な宇宙論の間にはもむしろ、こうした宇宙論の残存物にたいする近代アフリカ人の解釈とアフリカ人によつて解釈されたかぎりたマルクス主義との間に、若干の類似点がある」こと。

二、アフリカ人が「観念論と唯物論とをアフリカ化してオリジナルな全体にしあげつつ」両者の新しい総合をなしとげることに成功することは、決して全くありえないことではないこと。

だが、私が賛成しないのはつぎの点だ。すなわち、マルクスと毛沢東に同時にであい、ロシア革命が史上最初の労働者国家を建設してからずつとのちにロシアを知るにいたつた点に、絶対的であると相対的であるとをとわず、とにかく何らかの利益があるという点だ。たとえアフリカ人が、私とともに、ソ連が現在までにすでに労働者国家の全体的な反対物—つまり国家資本主義社会に転化されてしまつたことを信じないとしても、ソ連と中国とは世界的な哲学であるよりもむしろ世界的な権力であり、そこに支配しているイデオロギーは決してマルクスが最初に彼の人間主義的哲学をつくりあげたとき、彼の脳中にあつたものではない、という事実はいぜんとしてのこつている。マルクスがつぎのようにかいたとき、彼はまさにこの点にたいして警告を発したのだつた。「われわれはとくに社会を抽象物として個人に対立させて再建することをさけるべきだ。個人こそは社会的存在なのだ」（城塚・田中訳『経済学哲学草稿』一三五頁）。

「共産主義は直接の将来の必然的な形態でありエネルギッシュな原理である。だが共産主義は、そのようなものとしては、人間的な発展の目標ではなく、人間的な社会の形態ではない」（前掲訳書）。

アフリカのマルクス主義的人間主義とアメリカのそれとの間にある親近さの要点は、現代の、未来、—つまり世界の発展—すなわち国際的な規模で究極まで遂行されるべき未完成な革命とのかかりあいである。私がアフリカに旅行したのはこのためなので、たんに個人的に指導者の見解をきくはかりでなく、現在の危機的な歴史の転換期にさいして街頭や密林の庶民の思想をしろうとするためだつた。

まず私たちは、汎アフリカ主義の三つの代表的な指導者—ナイジェリア人、セネガル人ならびにギニア人の見解をとりあげよう。私がアジキイウエ博士と会見したとき、彼はつぎのようにのべた。

「私は理論を実践から分離することはできない。私たちがいだいている哲学は、それを海外で評価してもらうように体系化されてはいない。その根源を示させていた

だきたい。私たちの哲学は土地保有と結びつけられている。ここでは、土地保有は共同体的だ。という意味は、すべての人が土地に一定の利害関係をもつているということだ。すべての人は土地を売ることはできないが彼の息子たちはその土地の相続人だ。土地は彼らのものだ。彼らは、その土地を利用あてに売ることができるという意味では、個人として土地を所有しているのではない。こうして土地は共同体的になつたのだ。人々は土地を共同じて保有する。だから、私たちのところには、土地のない農民はいない。……ここには永続的な労働者階級がいない。現にそうした階級があらわれつつはあるのだが。ここには土地のない農民も、永続的な賃金労働者もいない。だから、マルクス主義的な社会主義は私たちには適用されないが、アフリカの、社会主義、ナイジェリアの社会主義は私たちに適用される。この理論が体系化されるべきことは疑ない。だが、そうしたことはまだやられてはいない」。

「私たち自身の社会主義の型である福祉国家は、決して共産主義でもないしマルクス主義ないしフェビアン式ギルド社会主義でもないが、私たちの生活様式に適したものだ。私たちはこれに固執している。福祉国家は、基本的には社会主義的な信念に根ざしている。私たちの国民の大多数は自由企業を信じている。だが自由企業は、どんな犠牲を払つても利潤を獲得することを意味すべきだとは信じていない」。

青年と労働者とはちがつた社会主義を考えている

アー・ジキイウエ博士に反対する人々の苦情は、自由企業が不幸にして、どんな犠牲を払つても利潤を獲得することを意味するということだつた。私がラゴスで出席した、青年会議と労働組合が開催した大衆集会は、開発計画によつて要求される予算の貧しいことに反対していた。

政府側の人々と街頭の人々の間には、彼らのいだくアフリカ社会主義の概念の間にちがいがあることはきわめてあきらかだ。同様なことはセネガルにおいても間違いない。そして、もちろん、カサブランカ・ブロックとモンロビア・ブロックの間にも相違がある。だが、私がセンゴール大統領にこのことを尋ねたら、彼は、「そうした相違は決して重要なものではない。重要なのは、アメリカとソ連との分裂だ」とこたえた。

「ソ連共産党第二二回大会の綱領はアメリカのそれと同様に—全く唯物論的で、電気洗濯機とテレビの文明だ」。

「あなた方は共産主義をもち、アメリカの自由企業をもち、そして西欧では計画をもつている」。

「それぞれのイデオロギーは一つの真理をもつている。だがそれは、たんに部分的な真理にすぎない。一切が唯物論的ではなく、精神的なものに余地をみとめるイデオロギーはどこにあるのだろうか？　そうしたイデオロギ

ーがわれわれのイデオロギーなのだ。

われわれは、全く正当に、われわれが社会主義の手段を用いているというべきだ、と私は考えている……」。

ネグリテュードは決して純粋な復活ではない。それはアフリカの歴史と文化の近代への適用なのだ。われわれは、二〇世紀のアフリカのために新しい文明を創造することをみとめる目的で、ヨーロッパの技術をとりいれているのだ」。

「マルクス主義のなかには、決定論と、科学的で推理的な理性と、人間主義がある。革命は科学的であるとともに哲学的なのだ。アインシュタインは二〇世紀にそくするが、芸術家も二〇世紀にそくする。二〇世紀の文化は科学的文化以上のものだ。共産主義は決して全体的な真理ではない。それは抽象的であり科学的である。この点で、共産主義は共産主義に似ている」。

「黒いアフリカでは、われわれは共産主義と資本主義から科学をとりいれることができ、そしてアフリカから今日、黒いアフリカのための方法を発見する文化こそはわれわれが必要とする文化なのだ。われわれは、アフリカ的な文化を、テイルハール・ド・シアルダンの人間学の結論を、欲するのだ。

人間主義—抽象的なそれと具体的なそれ

[illegible]

この文章の筆者にとつては、センゴール大統領の人間主義について気になるところは、それが、具体的・特殊的であるべきところで一般的・抽象的だという点だ。セネガル社会主義とマルクスがえがいた社会主義との間の基本的な相違は、決して「精神主義」と「唯物論」の間のちがいにあるのではなく、理論と実践の間のちがいにあるのだ。私にとつては、アフリカ革命の悲劇は、その指導者たちが技術の後進性についての意識と工業化、しかも急速な工業化の必要によつて余りにひどく重圧をうけているので、援助を求めるためにはほとんど排他的に技術的に進歩した諸国の既存の権力の方にむかつて、これらの国のプロレタリアートの方にむかつていないという事実からでてくるように思われる。ここでいま一度、私は、どのアフリカ国家が、たとえドゴールのフランスであれ、ケネディーのアメリカであれ、あるいはフルシチョフのソ連であれ、どこの国のどんな資源から援助をうけることにも反対するものでは決してないということを、あきらかにさせていただきたい。西側の帝国主義は数世紀にわたつてアフリカを搾取し、その労働力と天然資源の一部を、それをもともと本当に所有していた国にかえすにはいまが絶好の時期だ。だが、このことは、社会主義者にとつては、現在の主要な問題ではない。

現在の主要な問題は、なによりもまず独立を可能にした当のもの、つまり自己自身の人民との関係、であり、[illegible]、レーニンが、たんに「[illegible]的革命の発端としてロシア・プロレタリアートの天才を発見したのと対照的に、「アフリカの指導者は、抑圧者のそれと同様にプロレタリアのそれであると社会主義のそれであるとをとわず、一切の「外国の」イデオロギーをしめだしている。「アフリカは、その個性と文明と固有の構造にたいする尊敬を傷けて、なんらかの諸理論ないし諸イデオロギーの体系の有機的な構成物になることには賛成できない」。マルクス主義が理解と実践の統一ではないかのように、彼は、「哲学はわれわれの関心をひかない。われわれは具体的な必要をもつている」と主張している。

新しいインターナショナル

ギニアがドゴールのフランスにたいするその大胆な「ノー」の発言によつてなしとげたことは、人間的な要素を決定的なものとして再建することだつた。これは—そして他のなにものでもなくこれのみが—行動における新しいものであり思想における新しいものだつた。これは—そして他のなにものでもなくこれのみが、現代にでは、まだハンガリー革命のなかで、ついでアフリカ・アジア・ラテンアメリカの世界で、そして最後にアメリカの黒人の間で翻訳されたマルクスの人間主義だつた。これは—そして他のなにものでもなくこれのみが—大衆的

な労働党をもたない政治的に「おくれた」アメリカ労働者を生産点自体におけるオートメーションとの闘いのなかで、あれほど戦闘的にしたのだ。山猫ストにたち、決してオートメーション化されない人間的な生産関係を要求するアメリカ労働者は、もし私たちが人類の絶滅をもつておびやかす核戦争による大虐殺をさけるべきだとするならば、全世界にわたつて本質的な同様の新しい領域を期待している。

ロシアの共産主義者がヘーゲルの神秘主義を攻撃しているにもかかわらず、こうした神秘は、ヘーゲルが「その中にだけ理念がある自己決定は、自らが陷るのをきかねはならぬ」とかいたときフランス革命の衝撃のもとで今日の具体的な現実を先取りしていた。

されは、独立したアフリカよ！　世界支配のために闘つている世界権力の二大ブロックによつて汚されないで陷れ！　諸君はすでに諸君の政治的自治を獲得した。諸君はいま経済的独立のために闘いつつあり、そして理念の自己決定をも自由に表現している。なぜなら、数世紀にわたつて蓄積された思想は、大衆の偉大な創造性―つまり今日の革命によつて実りみたかにされたからだ。ハンガリーの革命家たちの側での自由を獲得しようとするせい一ぱいの努力が、マルクス主義の理論にもとづいて教育されたにもかかわらず、ついにマルクス主義の　尊者によつて裏切られることになつた彼らを、理論的なマルクス主義的人間主義者にしたてあげたのと同様に、自山への突進は、アフリカの革命家たちを活動的なマルクス主義的人間主義者にしたてあげた。ほかの諸国のマルクス主義的人間主義者たちは、諸君の声に耳を傾け、諸君の助力によつて、国家の統制から解放され、世界の再建を願いつつ新しいインターナショナルを建設しようとまちかまえている。

今日におけるマルクスの人間主義

附・疎外の理論―マルクスがヘーゲルに負うところのもの

ラーヤ・ドナエフスカヤ
三浦正夫訳

3778

訳者はしがき

このパンフレットは、『疎外と革命』の著者で、アメリカにおける「マルクス主義的人間主義者」と称する反帝国主義・反スターリン主義の立場に立つ革命的マルクス主義者団体の理論的ないし実践的指導者ラーヤ・ドナユフスカヤ女史がかいた最近の哲学論文をあつめたものである。

前進社の委嘱をうけてこゝに訳出した才一論文『今日におけるマルクスの人間主義』はアメリカにおける新フロイド派の左翼にぞくするエリッヒ・フロム教授（彼にはラーヤの本論文の脚註の中にのべられているように『マルクスの人間概念』の著書があり、その附録にT・B・ボットモア教授の訳した『経済学哲学草稿』の全文が、『ドイツ・イデオロギー』『ヘーゲル法律哲学批判学説』などとともに収められている。）の編著にかゝる最近出版されることを予定されている新著にラーヤ女史が寄稿した論文で、最新のデータをもちじえて、彼女がその主著『疎外と革命』に見事に展開したマルクス主義的人間主義者の基本的な主張を短いスペースのなかにきわめてあざやかにまとめあげている。

才二の論文「疎外の理論」は、彼女たちがやっている「ニュース・アンド・レターズ社」から年半の七月にだされたパンフレット　フリー『スピーチ運動と黒人解放』の附録の一文であり、彼女がアメリカ各地の大学生や公民権運動に参加した労働者たちに招かれて行った講演の要約である。

いずれも、ラーヤ女史の主張してやまないマルクス主義的人間主義の本質を理解するためにきわめて有益だと信じるので、女史の同志的好意とのもとに、いまこれをパンフレットとして読者諸君のお手もとにおとどけする次第である。ラーヤ女史も才一論文のなかで主張しているように、マルクスの『資本論』の論理構成の基礎におかれているものは、彼がヘーゲルの否定の論証法にもとづいて『経済学哲学草稿』のなかに展開した疎外論の哲学であり、彼女の解釈によれば、マルクスにあつては哲学と経済学と――同時に政治つまり階級斗争の実践とは人間主義を軸としてときはなちがたく有機的に結びつけられている。ぼくたちは、このパンフレットがまさに長崎造船社研からだされた『ソ連経済と価値法則』と併読されることを、そしてすゝんでいくらか金はかるけれどさきに現代思想社からだされた彼女の主著『疎外と革命』をもあわせよまれることを切望してやまない。

なお、訳文中大カッコ〔……〕にはさまれた部分は、主として引用文の邦訳者のことに該当する箇所をあげて読者諸君の参考としたものだが、ぼくたちのホンヤクはもつ

ばらラーヤ女史の論文に引用された英訳文によっているので、マルクスの原文（独文）から訳出された邦訳文とは若干ちがつていることをこゝにお断りしておきたい。

一九六五年十月十八日　三浦　正夫

マルクスが『資本論』の多くの革稿を構成しなおして（第一巻の初版と再版を公刊したのは、第一インター・ナショナルが活動していた、一八六四年から七四年までの十年間だつたが、この十年間はアメリカの南北戦争とパリ・コミューンが勃発した時期にあたつていた。

『資本論』は、理論に関する新しい考えを、つまり理論と実践の間の新しい弁証法的な関係をうちだし、歴史についての考えの重点を理論の歴史から生産の歴史へと移動させた。このことは、マルクスが、一〇年以上にわたつて当時の経済学や階級闘争に関する経験的な研究に勇力を集中したのち、再び彼自身の哲学的人間主義に「帰還した」ことを意味する。こうした彼自身の哲学的人間主義への帰還が、一だんと具体的な水準の上で行われ、マルクスの当初の人間主義的な考えを薄めないでむしろこれを深化したということは、なんら驚くにあたらない。このことは「労働日」に関する節のなかにはつきりとみとめられる。つまり、マルクスは、アメリカで南北戦争が終つた直後に行われた、労働日短縮のための大衆運動に刺激されて、一八六六年になつてはじめてこの節を書こうと決心したのだ。さらに、このことは「商品の物神的性格」に関する節のなかにもハッキリとみとめられる。マルクスは、彼がパリ・コミューンのあとでこの節に「著しい」変更を加えたことをわれわれに報告している。それはかりでは、ない。このことは、彼が経済を分析するためにつくりだした独自な諸範疇や、彼がヘーゲル弁証法を創造的に使用したことのなかにもハッキリとみとめられる。人間主義は、マルクスのこの傑作（『資本論』）に、力と方向とをあたえている。ところが、たいていの西欧のマルクス主義の研究家たちは、いまでは有名になつたあの一八四四年の『経済学哲学草稿』（『資本論』）の間の関係については、これを表面にださないで満足しているか、あるいは、この両者の連続性をハッキリとうちだす場合でも、これをマルクス主義の倫理的基礎に関する限り色にとどめて満足している。こうした態度は、哲学ならびに歴史的事実としてのマルクスの人間主義を、具体的な経済的搾取や政治的自由の現実的な欠除や、マルクスの哲学の「実現」――つまり個個の個人の精神的能力と肉体的能力とを再び統一し、マルクスの人間主義の肉体であり魂である「全面的な活動能力をもつた」個人の実現――を阻止する条件を廃止する必要を敵いかくす一個の抽象に転化してしまおうと試む人人のためにひろく扉をあけはなつものようにも思われる。

一八四四年の『経済学哲学草稿』は、「科学的社会主義」への「道を準備する」ものでは断じてなかつた。人間主義とは、マルクスが「科学的経済学」ないし「真の革命的な政治学」への発足への旅の途上で「通過した」一段階では断じてなかつた。人間主義的哲学とは、まさにマルクス理論という完全な統一体の基礎そのものにほかならない。マルクスの理論は、「経済学」や「政治学」や「社会学」に組分されることはできないし、まして

ルシチョフや毛沢東の手中にかたく握りつゞけられているようなスターリン主義的な一枚岩的な創造物と同一視されることは、できない。

一八六七年にだされた第一版から、マルクスが一八八三年に死去する前にだされた最後の版にいたるまで、『資本論』の一切の版のなかで、フランス版（一八七二――七五年）だけが、マルクスがあとがきでのべているように、「オリジナル版から独立した科学的な価値」をもつ変更をふくんでいた。「天分も衝かんとし」四、運命を自己の手中につかもうとするパリの大衆の革命的行動は、マルクスのために二つの最も基本的な理論上の問題をあきらかにした。すなわち、資本の蓄積と商品の物神的性格の問題である。マルクスによる労働日短縮闘争の分析が『資本論』の構造の中軸になつたのと同様に、フランス版にみられたオリジナル版に追加された部分は、資本論の精神――つまり現在のなかにはらまれている未来――の中核になつた。こうしたテキストの変更には二種類のものがあつた。そのひとつは、「僕たちが今日国家資本主義とよんでいるもの――つまり資本の集積と集中の法則が頂点まで発展して「たゞ一人の資本家なり、たゞ一つの資本家会社なりの手に」四帰すること――の予言にひとしいものだつた。さて、第二の変更は、第一に固有な商品の物神的性格を「この形態自身」四から発生するものとして解明することだつた。マルクスは、ただ自由に連合した労働だけが価値法則を廃止することができ、たゞ「自由に連合している人間」四と結論したのだつた。

既成の国家権力がマルクス主義を「実践している」とかマルクス主義を基礎としているとか主張している、歴史上の現時点にあつては、マルクス自身が実践という言葉で何をいおうとしたかを今一度ハッキリと確かめておくことが最も必要だ。が、それは自由ということだつたのだ。たえずマルクスの出発点でもあり帰着点でもあつた、自由という観念は、資本主義の発展の「冷酷な法則」に関する徹底たる苦心をはらつた独自な分析によつて具体化された。こうした分析は、いかにして「物体」（つまり搾取にもとづく社会のたんなる対象）としてのプロレタリアートが「主体」になるか、すなわちプロレタリアートが疎外された労働の条件にたいして反逆し、そういした反逆によつて「否定の否定」を、つまり自己解放を達成するかということをあきらかにしている。要するに、『資本論』は、一八四三年にマルクスがはじめてブルジョア社会と決別し、彼がブルジョア社会の思想上の最高の達成物だと考えたもの――つまりイギリスの古典経済学とフランスの革命理論とヘーゲル哲学とを、解放の理論、すなわち彼が「完成した自然主義もしくは人間主義」（城塚・田中訳『経済学哲学草稿』一三一頁）となづけた、人間の活動についての新しい哲学に組立てたときに開始された、二五年にわたる研究の到達した最高点なのだ。

3780

一九五六年のハンガリー革命は、マルクスの人間主義を、アカデミックな論争から、われわれにとつて生死にかゝわる問題にかえた。マルクスの人間主義にたいする関心は、その翌年に中国できわめて短期にわたつて「百花斉放」が行われたとき、一そう強められたが、この全体主義国家は突如としてこの花をしぼませてしまつた。(1)さらに一九五八年から一九六一年までにわたつて、アフリカ各国の革命が新しい才三の世界が成立したことを証明したが、この世界の基礎によとたわつている哲学も人間主義にはかならなかつた。(2)

一九四〇年代の中葉と一九五〇年代の初期には、西欧では マルクスが一八四四年にかいた人間主義に関する諸論文が再発見されたのだが、冷戦とマッカーシズムのために、アメリカはこうした消息からきりはなされていた。ところが、いまでは、アメリカ人たちは、遅れて出発したために失われていたとの包括的な討論のなかでとりもどす機会を手にしている。一方には、即時解放を要求する黒人の運動、他方には核戦争の脅威を現実のものとした一九六二年のキューバを截つたミサイル危機、それらがこの討論を再燃させることを助けたのだ。一人の学者も、たしかに彼独自の方法で、マルクスの経済学的範疇と哲学的範疇との内面的な同一性を把握したにちがいない。その学者とは、非マルクス的・非ヘーゲル的な経済学者、故ヨゼフ・シュムペーターなので、彼はマルクスの天才はまさに「理論に関する観念（アイデア）」に、つまり「歴史的な叙述を歴史的な特性」(3)に転化させた点にあると指摘したのだつた。

ほかのところで、(4)わたしは『資本論』全四巻（『剰余価値学説史』をふくめる）ならびに、それらと一八四四年の 『経済学哲学草稿』との関係とを詳細に分析しておいた。こゝではスペースの関係を考慮して、わたしは、わたしの叙述をこの基本的な理論に制限せざるをえない。すなわち、マルクスによる価値と商品の物神的性格の分析なのだが、この二つの理論は、実際上は、たゞひとつの決定的な、統一された、疎外の理論、あるいは弁証法的に理解された史的唯物論の理論なのだ。

「人間の意識がその存在を決定するだけではなく、反対に人間の社会的存在が彼らの意識を決定するのだ」(5)というマルクスの発見は、彼自身の疎外された労働に関する理論、もしくはヘーゲル弁証法の中核としての疎外論から決してずれてはいなかつた。だが、資本主義下の現実の労働過程にたいするマルクスの正確な分析は、ヘーゲルの『精神現象学』のなかにのべられている疎外のどの段階よりも一だんと具体的であり、生き生きとしており、破壊的であり、――そしてもちろん一だんと革命的だ。全くヘーゲル的な型にしたがつて、マルクスは創造性に焦点をあてゝいる。だが、ヘーゲルとはちがつて、彼はこの創造性を現実の生産過程にもとづけている。ここで、マルクスは、たんなる観念ではなく観念をいだく

人間を直視して、彼が初期にいだいた、労働者の「普遍性に対する要求」(6)という考えを発展させている。彼がいまやみとめる「新しい情熱と新しい力」（向坂訳『資本論』四三四七頁）は、たんに旧秩序を顚覆させるためばかりではなく、新しい秩序――つまり「各個人の完全で自由な発展を根本原理とする社会」(7)を建設する為に生誕するのだ。

『資本論』のなかで社経済学上の概念と政治学上の概念と哲学上の概念とは、緊密に有機的に関連させられているので、一九四三年に(8)ロシアの理論家達がはじめて価値に関するマルクスの分析から公然と決裂したとき、彼らが 『資本論』の弁証法的な構造をも否定して、『資本論』を「教授する」場合には第一章を除去せよと要求せねばならなかつた。『資本論』は「西欧の」哲学について用を大きくして語つてはいないので、彼らはこうした経済学上の論争のなかに哲学的な意味がふくまれていることを見ようとしなかつた。だが、彼らは、マルクスの弁証法的な哲学の伝統を継承してきたソヴエト・マルクス主義の理論機関誌（『マルクス主義の旗のもとに』）がなぜその発行を停止したかという理由を知ることができなかつたのだ。その後、たちいつた混乱をひきおこすこともなく、またマルクス経済学に関する旧来の解釈にたくらふれることもなく、マルクスの価値に関する分析の修正は標準的な共産主義者の分析になつてしまつたのだ。マルクス理論の全体は、それからひらいたえず既製のマルクス主義にとつては厄介千万な苦手だつた。一九一四年末にレーニンがマルクス経済学とヘーゲル哲学との有機的な結びつきを十分に把握するためには、第二インターナショナルが崩壊し彼が彼自身の哲学的過去と決別することが必要だつた。

そして、このときいらい、レーニンは、彼自身をもふくめた一切のマルクス主義者を批判するにさいして非妥協的な態度をとるようになつた。彼のアフォリズムのひとつのなかで、彼はつぎのようにかいた。「もし諸君がヘーゲルの『論理学』の全体を研究しこれを理解しないならば、マルクスの 『資本論』――とくにその第一章を十分に把握することはできない。だから、過去半世紀にわたつてマルクス主義者たちは誰一人として、マルクスを理解しなかつたのだ！」（レーニン『哲学ノート』第一分冊 松村訳 岩波文庫一五七頁）

「商品の物神的性格」と題された 『資本論』第一章の終節よりも注目すべき分析をもくろみている文章は、経済学の歴史のなかにみられないし、またマルクスの「ヘーゲルの影響下にあつた初期」にもこの文章よりもヘーゲル式な文章はない。そこ（『資本論』第一章終節）では、哲学と経済学とは、偉大な文学作品のなかで内容と形式とがひとつに統一されているように、歴史と密接に結びつけられている。マルクスがパリ・コミューンの後フランス版に一そうたちいつた変更を加えたとき、こうして附加された一五頁はバイオリンの糸のようにかた

くひきしめられていた。われわれは、マルクスが、コミューンの最大の達成はそれが「自ら活動する行動体」（木下訳『フランスの内乱』岩波文庫九五頁）だつたことだと考えていたことを記憶にとゞめておかねばならない。コミューン戦士によつて行われた社会再組織の全面性は、マルクスに、価値形態の問題全体への新たな洞察をあたえた。なぜなら価値形態は歴史的に決定されているたばかりでなくさらにブルジョア思想をも制約したからだ。資本主義的な生産の条件のもとでは、哲学はイデオロギーに――つまり虚偽の意識に堕落させられてきた。資本主義的生産にとつて適切な思想の諸範疇は、アダム・スミスやリカードー、つまり労働は一切の価値の源泉だという両企的な発見をなしとげた著者たちをもふくめた一切の人々によつて、無批判的にうけいれられた。このことが、彼らがなぜ、右のような発見を行つたにもかゝわらず、商品の物神性を解消することができなかつたという理由なのだ。古典経済学はこゝでその歴史的な疎害にぶつかつた、とマルクスは結論している。

労働生産物の商品形態は、主体の客体にたいする――つまり生きた労働の死んだ資本にたいする強められた関係のために、物神になつたのだ。人間の間の関係は物の関係としてあらわれる。なぜなら、われわれの疎外された社会では社会のことこそが、「あるがまゝの私的労働者の間の関係」（同）だなのだから。死んだ資本が生きた労働の主人なのだ。商品の物神性は、ヘーゲルの表現を用いるならば、毎日毎日死んだ労働の支配すなわち機械によるしめつけのもとで苦しんでいるプロレタリアートをのぞく一切の人々にとつては、「精神の性質そのもの」（同）として通用する阿片なのだ。それゆえ、マルクスは、自由に適合した労働いかいは、何ものも商品から物神性を剝ぎとることはできないと結論している。一九四三年にロシアの理論家たちが、何ものも商品から物神性を剝ぎとるべきではないと決意したのもつともだ。

労働者にたいする搾取を続いかくすために必要なイデオロギーは、労働者にたいする搾取がその形態を私的資本主義から自ら共産主義と称する国家資本主義へと変化させたときも、決して搾取の本質をかえはしなかつた。中国とロシアとの間のイデオロギー上の分裂も、決してこの両国における搾取関係をほりくずしはしなかつた。もしマルクスが再び地上にたちかえるなら、彼はイデオロギーの新しい形態――つまり国家計画やそれの物神礼拝のなかに、彼が資本主義発展の冷厳な法則の別様的な結果として予言した国家資本主義的な発展をみとめるのに何の困難をも感じないことだろう。われわれの世代は、以前のいかなる世代にもましてよりよく、問題は国有財産たい私有財産のそれではないことを理解するはずだ。問題は自由のそれなのだ。自由が制限されたところではどこでも、または自由が制限されたときはいつでも、マルクスは、実践上でも理論上でもそうした害毒にたいして闘つた。こうして、古典経済学者たちが「自由な労働」

――彼らはこの言葉によつて賃労働を意味した――について語つたとき、マルクスは辛辣にかいた。「彼らにとつては、かつては歴史が存在した。だが、現在ではもはや歴史は存在しない」（高木佑一郎訳『哲学の貧困』前掲書一六六頁）と。

マルクスの価値、もしくは「抽象的」な、「価値を生産する」労働に関する最も大切な理論が疎外された労働の理論であることは明瞭だ。人間主義的な諸論文のなかで、マルクスは、一体なぜ彼が「疎外された労働という概念をもちいて」経済学的事実を分析したかを説明した。「……われわれは尋ねよう。人間が自分の労働を疎外するといつたことが一体どのようにしておこるのか？　一体どのようにして、こうした疎外が人間的発展の本質のうちに基礎づけられるのか？　と。われわれは、私有財産の起源に関する問題を、疎外された労働と人類の発展行程との関係という問題におきかえることによつて、この問題を解決するためにすでに多くのことをなしとげてきた。なぜなら、私有財産について語る場合、ひとは、人間の外部にある事物を取扱つていると信じているからだ。だが、労働について語る場合には、ひとは直接に人間自身を取扱つている。問題をこのように新しく定式化することのなかには、それ自身すでにその解決がふくまれている。」[5]

だが、『資本論』を完成したとき、マルクスは、工場における活動ならびに「自由と平等と財産とベンタムだけが支配する」（市場における商品としての資本主義下の労働の、疎外された性格を分析するための経済学上の諸範疇をつくる必要を感じていた。

マルクスは、たんに価値ならびに剰余価値の理論を説明するばかりでなく、どうして堕落した人間関係が生産点に存在するかを示すために、特殊な経済的諸範疇をつくりだしたのだ。あたかも労働者が彼の両手を身体からきりはなしてしかも手の働きをつゞけさせることができるかのように、労働という範疇をば活動としての労働と商品としての労働力に分けることによつて、マルクスは、労働力はそのように身体からきりはなされることはできないから、工場へ入つてゆくのは労働者自身だということを示すことができたのだ。そして、マルクスのつゞけてのべるところによると工場のなかでは、労働者の能力は機械のたんなる附属品になり、彼の具体的労働は集された抽象労働の集団に帰せられるのだ。

ところで、もちろん、「抽象労働者」なんていう生きものはどこにもいない。いるものはあるいは炭鉱夫や仕立工や鉄鋼労働者やパン焼労働者なのだ。それにもかゝわらず、資本主義生産はゆがんだ性質をもつているので、そこでは人間が機械の主人ではなく、機械が人間の主人なのだ。工場のなかの大時計が時をきざむチックチックという動きのなかに「表現される」機械を媒介とすることによつて、彼が一定の時間内に一定量の生産物を生産するかぎり、人間の熟練は重要ではなくなる。労働時間

は、一切の具体的労働を一つの抽象的な集団に、奇妙に転化させてしまう機械の侍女なのだ。

マルクスは、彼がこゝかろみた具体的労働と抽象的労働との分析を、彼が経済学にたいしてつくした独自な貢献であり、「経済学の明確な理解がそれをめぐつて施回させる中軸」㈢だと考えた。資本家の「剰余労働にたいする人類のような渇望」（向坂訳『資本論』㈡）を「多産な自己を増殖する生気ある怪物」㈢として分析してゆく過程で、マルクスは、他に二つの新しい範疇をつくりだした。――つまり不変資本（機械）と可変資本（労働）とである。彼の主張するところによると、支払われようと支払われまいと、一切の労働は強制された労働であり、こうした労働は、ひどく疎外された活動なので、それはそれ自身資本の一形態になつてしまつている。

疎外された労働についての右のような叙述の正確さと独自性とは、もちろん、たんに「浪沢的なヘーゲル弁証法」の範疇ではない。それは、全く新しい真理の水準を再びつくりだした、マルクスの弁証法的な経験主義の範疇なのだ。マルクスによつて資本主義下の労働過程に関してかゝれた頁をおつてよんでゆくとき、成熟したマルクスは疎外された労働に関する彼の理論からはなれ去つたとか、疎外された労働とは、彼が「ヘーゲルのナゾのような言葉」をきりひらいて「科学的唯物論」へのみちを前進する以前に、マルクスが「あとにしたヘーゲル時代」から「残りもの」だとかいつた結論をだすことができるのは、政治的な動機にとらえられ、自己誘惑にかゝつた盲人だけだ。これと同時に、マルクスの経済学上の諸範疇が階級的な性格をもつていることには異論の余地はないから、こうした諸範疇からその階級的な内容を剝ぎとることはできない。今日のマルクス主義にちかい人人の一部は、こうした範疇の「中立性」を声高く主張しているけれど、彼らは実際はこうした範疇を、資本主義に、そして資本主義だけに適用している。マルクスの価値法則は資本主義の最高の表現なのだから、スターリンですら、――少くとも彼がすでに全国家権力と国家経済計画と一枚岩的な党をその手に握つたのちほゞ二〇年の間は、――価値法則がソ連で作用していることをみとめようとしなかつた。

なぜなら、彼は、ソ連は「社会主義国家」だと宣言したからだ。ソ連の理論家たちが公然とマルクスの概念と決裂したのは、ようやく第二次大戦のさなかのことにすぎなかつた。もちろん、実践上では、支配的官僚たちはこれよりずッと以前から搾取のコースをたどつてはいたのだが。

一九四七年に、アンドレー・ジュダーフは、全く劇的に（あるいは少くとも大声で）、「哲学に携る人々」がヘーゲルの弁証法を批判と自己批判という「新しい弁証法」によつておきかえることを要求した。一九五五年には、マルクス主義の概念にたいする批判は、彼の人間主義にまで及んだ。すなわち、レ・A・カルプーシンは、

「一八四四年の経済学哲学草稿における、マルクスの唯物弁証法の仕上げ」なる論文のなかでつぎのようにかいた。「マルクスは、哲学の限界をこえてすゝみ、プロレタリアートの実際生活と実際上の必要の見地から、現実の世界を認識しこれを革命的に変革する真に科学的な方法としての哲学の根本問題を分析した最初の哲学者だつた。」㈢

だが、ソ連の共産主義者たちは、それが彼らの没落を意味するところでは、「革命的な変革」に好意を示そうとはしなかつた。それゆえ、その翌年にハンガリー革命が、哲学を実現することによつて、――つまりソ連共産主義からの解放を実現することによつて現実を変革しようとしたとき、論争は機関銃の銃火のなかにおわりをつげた。こうして、マルクス理論のロゴフ（論理）の破壊について自由自身の破壊が行われたのだ。

その後たゞちに、ソ連の理論家たちは、既製の共産主義にたいする一切の反対者にたいして、際限ない烈しい攻撃を開始し、これらの反対者に、理由もなく、「修正主義者」というレッテルをはつた。ところが、彼らにとつて不幸なことは、非常に多くの西欧の学者たちは、このレッテルをうけいれ、支配的な共産主義者たちと「教条主義者」となづけた。もつとも、こうした支配的な共産主義者たちは、第二次大戦の前夜にはヒトラー＝ヒスターリン協定や毛沢東と蔣介石の間の統一戦線、そしてもつと最近になつてからはポーランド分裂などといつたひどい大施回や「柔軟性」を示したのだが、これと同時に、レーニンの哲学的遺産の二重性――つまり粗雑な唯物論にもとづく『唯物論と経験批判論』と『哲学ノート』の創造的な弁証法の間の二重性のなかにあつた一粒の真相は、もともと「西欧」にみられた反レーニン主義にとつて収穫の日をもたらした。ほかのところで、同わたしは『マルクス主義にたいする独自な寄與』をしたと考えられている「毛沢東思想」を、とくに彼の『実践論』と『矛盾論』とを分析した。この両者は彼が権力者の地位にのし上つたことに関連するからだ。さて、こゝでわたしは、わたしの叙述をつぎの事実に制限せねばならない。すなわち、人間主義に関する論争には、一方では純粋にアカデミックな問題になる危険があると同時に、他方では「修正主義」に関する「政治的」な論争からひきはなされる危険があるという事実だ。幸運なことには、マルクス主義は決してたんに学説のなかにあるものでもなければ、たんに国家権力だけによつて所有されているものでもない。それは、社会を新しい出発点の上に再建しようとする労働者の毎日の生活のなかにあるのだ。

たんにアフリカにおいてばかりでなく、ラテン・アメリカにおいても（フィデル・カストロも最初は彼の革命を「人間主義的」とよんだ）、西欧帝国主義からの解放は、人間主義の旗をひるがえした。そこで、ソ連共産主義の路線がかわつた。最初はレーニン主義はどんな種類の人間主義化をも、「人間主義的社会主義」の支持者に

よつて提起されるどんな改革をも必要としないと主張されていたが、いまではソグエートは戦闘的な人間主義の正しい継承者だと主張されてきた。こうして、全ソ政治的科学的知識普及協会事務局長といういかめしい肩書きをもつているM・B・ミーチンは、フルシチョフがロシア共産党オ二回大会で行つた報告は「マルクス・レーニンの社会主義的人間主義に関する壮大で高貴考え」だとのべた。そして一九六三年には、メキシコでひらかれた才一三回国際哲学会議の席上で、その報告のひとつを「現代世界における人間主義」だと題したのは、ソヴエトの代表団だつた。こうして、まことに奇妙なことには、西欧の知識人たちは、ボールを自分たちのところになげかえしてくれたこと、つまり、われわれがいま一度人間主義を論ずる軌道につたことについて、ソ連の共産主義者たちに感謝することができるのだ。

われわれは、思想の自由をば、それが思想統制の貨幣のいまひとつの面にすぎない点まで堕落させないでおこうではないか。

「汝の敵を知れ」といつた研究タイプとしての、われわれの制度化された「マルクス・レーニン主義」研究を一変するならば、方法論的には、こうした研究が、既製の共産主義のもとで教えられているものと少しもちがわないことがわかる。もつとも、こうした研究は「反対の原則」を教えていると考えられてはいるけれど。大切なのはつぎの点だ。――もしも思想の自由が人類の前進を実現するための哲学をその底に横たえていることを意味しないならば、少くともヘーゲルの意味では、思想は「理念」とよばれることができない。ヘーゲルにとつてはまさに、たゞ自由の対象だけが理念とよばれうるもの」だから、彼の場合には絶対的なものでさえ自由の地上的な空気を呼吸していたのだ。われわれの時代も、これにおとらず自由の地上的な空気を呼吸することができる。マルクスの弁証法が、たんに政治ないし歴史にかゝわるばかりでなく、認識にもかゝわるものだということは間違いない。だが、マルクスの階級闘争に関する考えがひとつの「神話」であり、プロレタリアートにたいする彼の「讃美」が「疎外に関する彼の哲学の終局の産物」だにすぎないと主張することは、理論と事実に平手うちをくわすことになる。この点で、こうしたアメリカ人の分析は「共産主義の弊害に関してダレス氏がこゝろみた毎週の説教の知的相棒の一種」だというジョージ・リヒトハイムの批判はまつたく正当だ。

マルクスの人間主義は、決して観念論をしりぞけるものでも、唯物論をうけいれるものでもなく、両者の真理をあわせふくむものであり、それゆえ新しい統一なのだ。マルクスの「集産主義」は、まさにその魂として、個人主義的な要素をもつている。これが、若きマルクスが自分自身を人間の個性を全く否定する「全く粗野で無思想な共産主義」（城塚・田中訳『経済学哲学草稿』一二七・一二八頁）から区別せねばならぬと感じた理由なの

だ。疎外された労働は、私的であると国家的であるとを問わず、「組織されている」と「無政府的である」とをとわず、「資本主義のなかでゆがめられていた一切のものの本質だつたから、マルクスは、一八四四年にこゝろみた彼の資本主義にたいする攻撃を、つぎの言葉でとじたのだつた。「共産主義はそのようなものとしては、決して人間発展の到達目標ではなく、人間的な社会の形態ではない」（城塚・田中訳『経済学哲学草稿』一四八頁）なお、こゝで用いられる共産主義の意味については、いろいろと解釈されているが、（たとえば城塚氏の訳注をみよ）、少くともラーヤ女史は、彼女の文脈から考えれば、これをガベーやフーリエやオーエンやバブーフなどの主張した平等主義的な粗野で無思想な共産主義――すなわち、私有財産の最初止揚の段階と考えているようだと。自由とは、私有財産の廃止よりも多くのことを、――はるかに多くのことを意味した。マルクスは、私有財産の廃止を、たんに「最初の止揚」（城塚・田中訳『経済学哲学草稿』一三〇頁）にすぎぬものと考えた。完全な自由は才二の止揚を要求した。こうした人間主義的な論文がかゝれてから四年の後、マルクスはあの歴史的な『共産党宣言』を発表した。彼の基本的な哲学は、新しい用語法によつても決して変更されはしなかつた。反対だ。一八四八年の革命の前夜に当つて、『共産党宣言』はつぎのように主張した。「個人の自由は万人の自由の基礎である」（大内・向坂訳、岩波文庫版『共産党宣言』六九頁）とも。こうした考え方は死ぬまで変らなかつた。彼の傑作（『資本論』）は、彼の生涯の活動と同様に、「自己目的として行為しうる、人間の力の発展」だけが真の「自由の王国」だであるという考えから決してはなれなかつた。こゝで再び、われわれの時代はほかのいかなる時代よりもよりよく、私有財産の廃止はたんに最初の止揚にすぎないという、若きマルクスの主張のよりどころとする理由を理解すべきだ。「こうした媒介――それは、それにもかゝわらずひとつの必要な前進なのだが――を止揚するまでは、自己自身から出発する積極的な人間主義は生れない。」（城塚・田中訳『経済学哲学草稿』二一六頁）

「積極的な人間主義」は、肉体労働と精神労働とがマルクスが「全体的な」（前掲訳書一三六頁）個人となづけるものゝなかに再び統一されるときはじめて「自己自身から」出発する。たしかに現代の核時代に生きる人々は、これまで一切の階級社会の落葉に横たわつている原則だつた肉体労働と精神労働の分裂が資本主義のもとできわめておそるべき程度に達したので、きびしい対立がたんに生産ばかりでなく科学自身をも特徴づけていることをヒシヒシと感じているにちがいない。一八四四年にマルクスが、「生活のためにひとつの基礎をもち、科学のために別の基礎をもつということはそもそもはじめからひとつの虚偽なのだ。」（城塚・田中訳『経済草稿』一四三頁）とかいたとき、彼は近代科学の袋小路を予期

していたのだ。われわれは一二〇年にわたつてこうした虚偽を生きてきた。その結果、われわれが知つているようにまさに文明が生きながらえるかどうかが問題になつているのだ。

この論文の筆者にとつては、われわれの時代に直面している課題は、第一には実践――つまり毎日の現実の闘争から理論への運動があることをみとめることであり、第二には理論からの運動が実践に適応することができる方法をつくりだすことであるように思われる。理論の実践にたいする新しい関係、「主体」つまり社会を再建するために闘いつゝある生きた人間を新しく評価することが最も大切だ。現代の挑戦は決して科学ないし機械にたいするものではなく、まさしく人間にたいするものだ。世界危機の全体性は、理論と実践の新しい統一を、労働者と知識人との新しい関係を要求している。全体的な哲学が探究されていることは、未開発諸国からなる新たな第三の世界によつて劇的にあきらかにされた。だが、こうした探究が行われている証拠は、全体主義的な政府からの解放のための闘いのなかにも、また西欧のなかにもみとめられる。こうした巨大な全体的な哲学にたいする探究が行われていることを確認するためには、たゞすべての哲学のなかで最も頑固なもの――つまり「大衆の後進性」という考えをすてさつて、大衆がオートメーションと闘い、人種的差別を廃止するために闘い即時の解放を要求するとき、彼らの思想に耳を傾けることが必要だ。知識を放棄することでは全くなく、これこそ認識の新しい段階の出発点なのだ。知識人の教条主義からの自己解放の、こうした新しい段階は、ヘーゲルがのべたように「具体的な真理へとむかつてすゝもうとする思想の衝動」を感じるときはじめて開始されることができるのだ。

哲学的な原理としてのパルティノスト（党の原則）を採用することは、「大衆の後進性」というドグマのいまひとつの表現なのだ。こうしたドグマによつて国家資本主義社会の知識人たちは、大衆は革命によつてひきまわし、管理し、「指導」してやらなくてはならない、という議論を合理化している。西欧のイデオロギストと同様に、彼らはすべて、党機関を建設するためではなく社会を人間的な基盤の上に再建するために十分な機が熟さねば、革命は決して成功しないということを簡単に忘れてしまう。政治における党の原則ないし一枚岩主義が、新たな数百万人の創造的なエネルギーを解放するかわりに、革命の息の根をとめるのとまつたく同様に、哲学における党の原則は、思想にたいして新しい領域をひらかないで、かえつてこれを窒息させてしまう。こうしたことは、西にとつても東にとつても、決してアカデミックな問題ではない。マルクス主義は解放の理論でなければ、それは全く無にすぎない。生活のなかでと同様に、思想のなかでも、マルクス主義は新しい人間の領域を獲得するための基礎をすえるものだ。そして、こうした新しい人間領域なくしては、どんな社会でも本当に成長することは

できないのだ。マルクス主義者としてのわたしにとつてこのことこそは哲学としてもまた現実としても、マルクス主義の真理のすべてであるように思われる。

註

㈠マルクスの『資本論』（ケア版）の第二巻への序文のなかで、フリードリッヒ・エンゲルスは、もとの原稿を、これにつけた頁数をみれば彼がどのようにしてこれを構成しなおしたかが分るように表示した。この点についてのわたしの分析については『マルクス主義と自由』（ニューヨーク、イウエイヌ出版社、一九五八年、一九六四年）（邦訳『疎外と革命』現代思潮社、一九六四年）の八七―九一頁をみていただきたい。

㈡マルクスの一八四四年の草稿は、いまではモスクワでだされているものをもふくめ二、三の英語の翻訳でよむことができる。だが、アメリカで一そう容易に入手できるのは、T・B・ボトモアによる翻訳で、これはエリッヒ・フロムの『マルクスの人間に関する考え』（ニューヨーク、フレデリック・ウンガー社、一九六一年）のなかに入つている。だが、わたしは、「疎外された労働」に関する論文以外は、ここではわたし自身の翻訳をつかつている。したがつて引用文に頁を指摘していない。

㈢とくに、ユージース・カメンカの『マルクス主義の倫理的基礎』（ニューヨーク、フレデリック・A・プレーガー社、一九六二年）（高野渉訳、岩波書店）参照。

㈣カール・マルクスの『フランスの内乱』（木下半治訳、岩波文庫版）は、パンフレットとしても、選集のなかでも全集のなかでも多数の国語で広く入手できる。

㈤『資本論』（シカゴ、チャールスH・ケア社、一九〇六年）第一巻六八八頁（向坂訳『資本論』（四）一一九頁）

㈥前掲書八二頁（向坂訳『資本論』（一）一三八頁）

㈦前掲書九二頁（向坂訳『資本論』（一）一五二頁）

㈧英語のよめる読者にとつて不可欠な本は、ロデリック・マックファークアーの『百花斉放運動と中国知識人』（ニューヨーク、フレデリック・A・プレーガー社、一九六〇年）だ。当時の中国における反抗の叫びは東欧のそれにも比較されるべきものだ。ハンガリー革命については、いまでは、パンフレットや論文にはふれないでも、実に多数の本がでている。マルクスの人間主義が演じた役割をたどるために重要だと思われる本はつぎのとおりだ。『イムレ・ナジ、共産主義について』（ニューヨーク、フレデリック・A・プレーガー社、一九五七年）、ジエレン

ッ・フェイト『ハンガリー強姦の背後に』（ニューヨーク、デヴィド・マッケイ社、一九五七年）（同じ著者が一九五六年にだした『ハンガリーの悲劇』は『民族社会主義革命―ハンガリア悲劇の十年』の題名で村松・橋本・清水訳（近代生活社）として邦訳されている）。『ハンガリー革命白書』メルヴィン・J・ラスキ編（ニューヨーク、フレデリック・A・プレーガー社、一九五七年）、『辛い収穫』エドムント・O・スティルマン編、フランソア・ブロンデイ序（ニューヨーク、フレデリック・A・プレーガー社、一九五九年）。目撃者の報告、とくに労働者評議会に関する報告としては、『レヴュー』誌（イムレ・ナジ協会、ブラッセルによつて定期的に発行されている）の諸論文が最も重要だ。いくつかの報告は『イースト・ヨーロッパ』誌にも載せられたがこの雑誌はとくにポーランドの指導的な哲学者アダム・シャフとレズエク・コワコウスキの間で行われたマルクスの人間主義に関する論争を発表して、ポーランドに関していい仕事をした。右の二人の哲学者の論文は、レオポルド・ラペッズが編集した『修正主義』（ニューヨーク、フレデリック・A・プレーガー社、一九六二年）と題する論文集のなかに翻訳されている。

(九)レオポルド・セダル・センゴール『アフリカの社会主義』（ニューヨーク、アメリカ・アフリカ文化協会、一九五九年）、セク・トーレの『歴史におけるアフリカの道について』は、英語のよめる読者のために『アフリカ・サウス』誌（一九六〇年、四月―六月号、ケープ・タウン）上にその一部が載せられている。これはいまでは外国でないと手に入らない。さらにわたしの『ナショナリズム・共産主義・マルクス主義的人間主義ならびにアフリカ・アジア革命』（アメリカ版一九五八年、イギリス版一九六一年の両者はミシガン州デトロイト、ニュース・アンド・レターズ社で入手できる）。

(十)わたしは決して、アメリカがこの問題の研究についてどの程度おくれているか、あるいはアメリカでの討論がどれほど低い水準にあるかといつた点について西欧の知識人がとつている態度を承認しているといおうとしているのではない。ヨーロッパで最初にマルクスの初期の論文が再発見された頃より四、五年前、ヨーロッパがファシズムのかかとにふみにじられていた時、ハーバート・マルクーゼは『理性と革命』（桝田・中島・向来訳、岩波書店）のなかでこれらの論文を取扱つた。この研究がこれらの論文のドイツ語のテキストにもとづいていたこと、これらの論文の英語の翻訳が手に入らなかつたこと、そしてマルクーゼ教授のゼミナールの講義についての論争が小さなグループに制限されていたことは事実だ。そしてまた、わたしが、西欧出版社や大学出版

部に、マルクスの人間主義に関する評論文やレーニンの『哲学ノート』（松村訳、岩波文庫）をぜひ出版すべきだと説得するのに多大の困難を経験したこと、も事実だ。わたしは、この二つの論文を、わたしの『マルクス主義と自由』（一九五八年）（対馬・三浦訳『疎外と革命』現代思潮社）への附録として採録することによつて幸じて発表させることに成功した。たか、当時でも、これらの論文は多数の読者の手には入らなかつた。マルクスの人間主義がアメリカで多数の読者の手に入り、アメリカの雑誌や新聞で広く注目されたのは、エリッヒ・フロムが彼の『マルクスの人間概念』のなかにマルクスの一八四四年の経済学哲学草稿の翻訳を採録した一九六一年以後のことだつた。それにもかかわらず、わたしはヨーロッパのマルクス学者の知的高慢さについて真の理由を発見できない。なぜなら、アメリカにおいてと同様にヨーロッパにおいても、人間主義に関する討論が具体的な水準、あるいは緊急な水準に達したのは、ハンガリー革命以後のことにすぎなかつたからだ。わたしが討論のおくれていることにふれるとき、わたしは、一九二七年にソ連のマルクス・エンゲルス研究所で一八四四年の草稿がリアザノンの編集のもとで最初に発表されたときから、これらの草稿が一般的な注意をあつめた時までの間永い期間をへたことを思いうかべているのだ。

(一)ヨゼフ・シュンペーター『経済分析の歴史』（オクスフォード大学出版部、一九五四年）（東畑訳、岩波書店）

(二)『マルクス主義と自由』、とくに第五章から第八章までを参照していただきたい。

(三)『経済学批判への一寄与』（シカゴ、チャールス・H・カー社）一一頁（武田・遠藤・大内・加藤訳『経済学批判』岩波文庫一三頁）

(四)『哲学の貧困』（シカゴ、チアールス・H・ケア社）一五七頁（高木佑一郎訳、国民文庫版一九二頁）

(五)『資本論』（ケア版）第一巻六四九頁（向坂訳、岩波文庫版（四）五四頁）

(六)『マルクス主義の旗のもとに』第七―八号、一九四三年。この号の価値法則に関する主要な論文は、「ソ連における経済学教授上の問題について」という題名でわたしが翻訳した。この論文はわたしの批評文『マルクス経済学の新修正』（長崎造船社研訳刊ソ連経済と価値法則」所収）をそして、『アメリカン・エコノミック・レヴュー』（一九四四年九月）に発表された。同誌の誌上で行われたこの論文をめぐる論争には、オスカー・ランゲ教授、レオン・ロジン教授ならびにポール・A・バラン教授が参加したが、この論争は一カ年つづき、最後にわたしの回答『マルクス主義の修正か再確認か？』（一九四五年九月号）（長崎造船社研訳刊『ソ連経済と価値法

則』所収）が発表された。

[2]『資本論』第一巻八四頁（向坂訳『資本論』（一）一四一頁）

[3]「客観性に対する第三の態度」に関するヘーゲルの言葉をみよ。「わたしがわたしの意識のなかで発見するものは、こうして誇張して万人の意識の事実にされ、精神の性質そのものとして通用するにいたった。」（ヘーゲル『論理学』ワルラスの最初の翻訳、オクスフォード大学出版部、一八九二年）

[5]エリッヒ・フロム『マルクスの人間概念』におさめられた「疎外された労働」、一〇三頁、一〇八頁、（城塚・田中訳『経哲草稿』一〇五頁）

[6]『資本論』第一巻一九五頁（向坂訳、岩波文庫版（二）六二頁）

[7]前掲書四八頁（向坂訳岩波文庫版（一）八三頁）

[8]前掲書一一七頁（向坂訳岩波文庫版（二）九五頁）

[9]『哲学の諸問題』（露文）第三巻一九五五年

[10]『マルクス主義と自由』（ニューヨーク、トウェイン社、一九六四年）のペーパーバック版にのせた新しい一章「毛沢東の抵抗」を参照のこと。これと同様な、哲学におけるレーニンの党派性のスターリンの一枚岩的な「哲学の党的性格」への歪曲を分析したものとしては、十分に文献を渉猟した明快なデーヴィッド・コラウスキーの分析、『ソヴエト・マルクシズムと自然科学、一九一七―三二年』（ニューヨーク・コロンビア大学出版部、一九六一年）を参照していただきたい。

[11]『プラウダ』紙、一九五九年二月六日、ここで用いている英語の翻訳は、『ソ連新聞のカレントなダイジェスト』一九五九年七月三日号にのせられている。

[12]M・B・ミーティンがこころみたこの会議の報告は『哲学の諸問題』（露文）一九五三年第一一号にのせられている。この会議の他の報告については、『ソヴエト思想研究』一九六三年第四号（ブリブルグ、スイス）をみられたい。

[13]ロバート・タッカー『カール・マルクスにおける哲学と神話』（ケンブリッジ大学出版部、一九六一年）

[14]ジョージ・リヒトハイム『西欧のマルクス文献』、一九五三―六三年』は、『サーヴエイ』誌第五〇号一九六四年一月にのせられた。

[15]『資本論』第三巻、九五四―五五頁（向坂訳『資本論』（一）三四七頁）

疎外の理論
―マルクスがヘーゲルに負うところのもの

「マルクスがどれだけヘーゲルに負うところがあるか」という問題は、決してたんにアカデミックなものではないし、またマルクスの生涯という歴史的時期だけに関するものでもない。ハンガリー革命からアフリカ革命にいたるまで、日本における学生のデモンストレーションからアメリカの黒人革命にいたるまで、自由のための闘いは現実を変革し、ヘーゲル弁証法を大学の講堂や哲学の書物から、歴史の生きた段階にまでひきだした。

こうしたヘーゲルの現代的なものへの転化が、マルクスを通じて行われたということには間違いない。だが、ソ連の共産主義のマルクスにたいする攻撃がヘーゲルを通じて行われたことも、同様に間違いない。ソ連の共産主義者たちは、いわゆる神秘的な絶対者のなかに「否定の否定」―つまり彼ら自身にたいする革命をみとめたのだから、ヘーゲルは依然として今日でもソ連の支配者たちにとってはきわめて生き生きと生きており何ともうるさい存在になっている。一九四七年にジュダノフが、ソ連の哲学者たちに「新しい弁証法」を発見するように要求していらい、いやむしろ「彼が批判と自己批判」こそが矛盾を通ずる発展というヘーゲルの客観的な法則におきかえるべき彼のいわゆる新しい弁証法だと宣言していらい、ソ連共産党第二一回大会でとくに哲学分科会がフルシチョフを「真の人間主義者」だと宣言するまでは、若きコルクスと神秘的なヘーゲルの二人にたいする攻撃はひきつづいて行われていた。こうした攻撃は、理論の上では、一九五五年にマルクスの初期の諸論文にたいする攻撃のなかで最高点に達した。現実の上では、こうした攻撃は、ハンガリー革命をたたきつぶすために結ばれた中ソ協定としてあらわれたのだ。

（註）中ソ論争が公開されたとき、中国共産主義者は実さいに、彼らがフルシチョフにすすめて、ハンガリーにたいする反革命的な介入をさせたという事実を高言した。

こうした知識人出身の官僚主義者たちはたたひとつのことを正しく恐じている。つまり、ヘーゲルの絶対的なものについての考えと、自由のための国際的な闘争とは、表面にみられるように、遠くはなれはなれになっているのでは決してないということを。

一、観念的なものと実在的なものとは決して遠くはなればなれになってはいない

マルクスがヘーゲルから手に入れたものは右にのべた命題なのだ。若きマルクスがひとたびブルジョア社会から袂別したとき、同時に彼をして当時の粗野な共産主義者たちから袂別することを可能にさせたものも、まさに右にのべた命題なのだ。ところで、当時の粗野な共産主義者たちは、ひとつの否定—すなわち私有財産の否定は旧社会の一切の弊害を廃止して、そして新しい共同体的な社会が生れるだろうと考えたのだった。

マルクスは、ヘーゲル哲学の中核であるもの、つまり疎外の理論を主張し、この理論から、もしもブルジョア社会における最大の疎外—すなわち人間の労働が疎外されて自己発展の活動から機械の附品に化しさるという事実が廃止されぬかぎりは、人間の疎外は私有財産を廃止しても決してなくなるものではないと主張した。マルクスは、労働の疎外のかわりに、決して新しい財産形態を、おかず、「個人の完全で自由な発展」（『ドイツ・イデオロギー』古在訳、岩波版一一五頁、『共産党宣言』大内・向坂訳六九頁、その他）をおいたのだ。

ヘーゲルのなかの多面的なもの、天上にあつて人間とひきはなされたもの、としてではなく人間存在の領域として、「絶対なもの」を完全に把握する、人間の無限の能力をヘーゲルが前提したことは、人類がアリストテレスの絶対的なものからどれだけ永い行程を旅しつづけてきたかをあきらかにしている。

アリストテレスは奴隷制にもとづく社会に生活していたので、彼の絶対的なものは「純粋な形式」におわつた。—人間の精神は神の精神にであい、事物がいかに驚異的であるかを沈思するだろう。

だが、ヘーゲルの絶対的なものは、農奴制を廃止したフランス革命から出発したので、彼の絶対的なものは空気を—地上の自由の空気を呼吸していた。たとえひとが絶対精神のなかに神をよみとるとしても、彼は理論と実践の統一の地上的な性質からのがれることはできないし彼は、人間が全体的な自由—内面的であるとともに外面的でしかも現時点における自由—の達成物として絶対的な実在性を追求するのである。ヘーゲルがのべたように自己の努力によつて「自己自身の精神」を獲得した農奴は「即自的意識」と「向自的意識」の間の闘争の一部となる。あるいは、もつと分りやすくのべるならば、疎外にたいする闘争は自由の獲得となるのだ。

ヘーゲルの絶対的なもののなかには、抽象的な形態をとつてはいるけれど、マルクスなら社会的個人となづけただろうと思われるものと、ヘーゲルが「普遍性に介入してくる一切のものから解放された」個性となづけたもの、—つまり自由自身の完全な発展が包持されている。

ヘーゲルにとつては、自由は決してたんに彼の出発点ではなく彼の帰着点だつた。このことが彼をこれほど現代的にしているのだ。このことは、たんにマルクスへの架け橋ばかりではなく、現代への架け橋だつた。そしてこの架け橋はヘーゲル自身によつて架橋されたものだ。

レーニンが、第一次大戦中ヘーゲルをよんで「レーニンは一九一四年から一六年までの間スイス亡命中ヘーゲルの『論理学』や『哲学史』を精読し、たんねんにノートをつくつた。その一部は『哲学ノート』として発表されている」マルクスの哲学的基礎にかえつたとき発見することになつたように、弁証法の革命的精神とはマルクスによつてヘーゲルに附加されたものではなかつた。それはヘーゲルのなかにあるのだ。

二、マルクスのヘーゲル弁証法批判と彼のヘーゲル弁証法

マルクス哲学とヘーゲル哲学の本質をうはいさろうとしたのは、ひとり共産主義者はかりではない。学者たちも同様に、マルクスはきわめて奇妙なヘーゲルの弟子なので、ヘーゲルの弁証法をすつかり歪曲したとはいわないまでも、これを否認する点までかえてしまつたと考えている。われわれがハーバート・メルヴイルが「認識の衝動」となづけたものにこの議論の終りのところで、出会うかどうかはのちに分ることだが、これ（いわゆる認識の衝動）はマルクスのなかにはハツキリとみとめられる。

マルクスの精神的発展には、ヘーゲルの内在性とこれの止揚という、二つの基本的な段階があきらかにみとめられる。ヘーゲルの内在性は、彼が青年ヘーゲル学派と袂別した時期を通じて行われ、彼は青年ヘーゲル学派の人たちに、彼らが理念を非人間化しつつあるという非難をなげかけた。それは、ちようど、彼が『ヘーゲル法律哲学批判』（『マル・エン選集』（大月書店版）補巻（四）所収）や『ヘーゲル弁証法批判』（正確には『ヘーゲル弁証法と哲学一般とその批判』、『経済学哲学草稿』（岩波文庫版）所収）の二つをかいた時期だつた。

マルクスの新しい唯物論的な見解には、なんら機械的なものはなかつた。社会的な存在は意識を決定する。だが、社会的存在は、ひとが新しい社会の諸要素を感ずることを、ましてやこれを見ることを阻止するしきり壁では決してない。

ヘーゲルの場合でも、過去と現在との間の関係としてはかりでなく、将来が現在に及ぼす牽引力、ないし全体が—たとえそれがまだ存在しないときでさえ—部分に及ぼす牽引力としての継続性が弁証法の主要な発条なのだ。

弁証法は、青年マルクスに、物質的な土台とは彼が「粗野」だとなづけたものではなく、反対に、それは世界の改造に努力をかたむけている主体を解放するものだという事実を見とどけているうちに、彼がプロレタリア

ートの世界意識の新しい段階をうちたてることをたすけたのだつた。

マルクスは、彼が学問の上で、古典経済学や古典哲学のお世話になつていることを忘れるような人物ではなかつた。彼は、この両者を、当時の現実の闘争のなかにしつかりと根ざされていた新しい世界観にかえたのだけれど、こうした世界観の根源は、スミスとリカード—との価値論でありヘーゲルの弁証法だつた。もちろん、マルクスは、ヘーゲルが客観的な歴史を、それがなんらかの世界精神の発展であるかのようにとりあつかい、あたかも観念が天地の間のどこかに浮遊しており、あたかも頭脳が一定の環境のなかで特定の歴史的時期に生活している人間の肉体の一部である如のなかにはないもののように、精神の自己発展を分析した点で、ヘーゲルをきびしく批判した。まことにヘーゲル自身は、もしわれわれが彼が生きた歴史的時代—つまりフランス革命とナポレオンの時代をたえず思いうかべていないならば、分りにくいだろう。そして、彼の用いた言葉はどんなに抽象的でも、彼は人間の歴史の脈搏に指をあてがつていたのだつた。

マルクスの『ヘーゲル弁証法批判』は、同時に、ツオイエルバッハをもふくめたヘーゲルの唯物論的な批判者にたいする批判なのだ。そして、ツオイエルバッハは、「否定の否定を哲学の自己自身との矛盾としてしか」論じなかつたのだ。

これに反して、マルクスは、抽象的な形態でではあつたが、弁証法の原理が歴史自身の運動の表現だということをあきらかにしている。

マルクスは、ちようど彼が絶対精神に到達したときにヘーゲル弁証法の批判を完成した。いや、むしろヘーゲル弁証法の批判からはなれた。マルクスによる絶対精神の再発見は、資本主義下の階級闘争の具体的な発展から生じた。そして、資本主義下の階級闘争はこの絶対的なものをつぎの二つに分裂させた。

「マルクスが資本主義発展の「絶対的一般的な法則」(『資本論』(四) 岩波文庫版、一四八頁)となづけた失業者の軍隊—すなわち産業予備軍。これは資本主義の崩壊をもたらす否定的な要素だつた。

二、「新しい力と情熱」(前掲訳書三四七頁)—これは労働者を旧社会の「墓掘人」(『共産党宣言』岩波文庫版五六頁)で新社会の創造者とする、否定のなかの肯定的要素だつた。

マルクスが完全にヘーゲルを止揚したのは、ここ—つまりヘーゲル弁証法にたいするマルクスの関係の第二の段階においてだ。労働という経済学的範疇の、活動としての労働と商品としての労働力への分裂と同様に、絶対的なものという哲学的範疇の右の二重業への分裂は、新たな理解の武器をきたえあげた。こうした分裂によつてマルクスは、断乎として肉体的労働と精神的労働との分裂を廃止し、人間の十分な可能性—すなわち真に新たな

人間の領域を解放する、全体的に新しい基礎の上に社会を確立するさいの、労働者の新たな創造的な活動に応ずる思想上の飛躍をなしとげることができたのだ。

三、人間の領域

もちろん、ヘーゲルは思想のなかでは一切の矛盾を解決したが、生活のなかではそうした矛盾がそのまま維持され倍化され強化されたことは間違いない。もちろん、階級闘争が矛盾を廃止しなかつたところでは、こうした矛盾はたんに経済はかりでなく経済理論家たちをもくるしめた。もちろん、マルクスがかいたように、最初の資本主義的恐慌(第一回の一般恐慌は一八二五年におこつた。エンゲルス『空想から科学へ』岩波文庫版五七六頁)がはじまるとともに、経済理論家たちは「資本主義の悪質選手」(『資本論』(二) 岩波文庫版一四四頁)になつた。

だが、なによりもまず、マルクスは、イデオロギーと経済とを、あたかも後者のみが基本的なもので、前者はたんに「見せ物」にすぎないもののようには、決して分離しなかつた。マルクスは、両者がともに生活のように現実的であると主張している。彼の最大の理論的労作「資本論」の全巻を通じて、彼は「商品の物神的性格」を予きひしく批判する。なぜなら、たんに生産点における人間の関係が「もの」としてあらわれるはかりでなく、とくに、資本主義下の人間関係はひどく歪められているので、右のようなことはたんに現象ではなく、まさに人間関係の現実の姿であるからだ。つまりそこでは機械が人間の主人で、人間が機械の主人ではないのだ。

マルクスの説く主要な点は、弁証法の人をかりたてる力は、人間の思想ではなくて人間自身だということ、しかも生産点における疎外された労働とともにはじまる人間の全体だということであり、さらに、ブルジョア階級の理論家たちは、現状をまもり「商品の物神礼拝の奴隷」であるため、彼らが生産のなかにおかれている地位のために虚偽の意識をもつが、他方プロレタリアは、生産のなかにおかれている地位のために、矛盾の解決にむかつてすすむ「否定的な原理」であるということだ。

『歴史哲学』のなかで、ヘーゲルはかつて、「人間が自由を獲得するのは、奴隷制からではなく、奴隷制を通じてだ」とかいた。ここでも、われわれは、「実践」とはマルクスが発見したものではなくヘーゲルが発見したものだということが分る。マルクスがやつたことは、実践をプロレタリアートの階級闘争の活動として規定することだつた。ヘーゲルの理論のなかでも、実践は「認識という理念」よりも高い地位にたつている。なぜなら、それは「たんに宇宙の成熟をもつはかりでなく単純に実在的なものだから」。

ヘーゲル自身が、彼の哲学を閉鎖された存在論的な体系として論ずることによつて、これも神秘的なヴェール

でおおつたことは間違いない。だが、われわれが、彼の絶対的なものは哲学者と物質的生産の世界との分離を反映するものにすぎないとか、あるいは彼の絶対的なものは、フイヒテからヤコビを通じてシエリングにいたる主観的な観念論者の枠な、あるいは知的な直観という空虚な絶対者だと考えるなら、それはヘーゲル哲学の完全な誤解だろう。ところで、右にのべた主観的観念論者たちの主張に共通する主観と客観の裸の統一の型は、ベーリー教授がきわめて美事にのべたように「節度のなさを犠牲にして客観性を占有する」ことだつた。

ヘーゲルの場合のように、出発点としてキリスト教がとられようが、マルクスの場合のように産業革命によつてつくられた自由のための物質的な条件がとられようが本質的要素はおのずからあきらかだ。つまり、それは、人間は自由を獲得するためには闘わねばならぬ、近代社会の「否定的な性格」はこうした闘争によつてバクロされるということだ。

さて、否定の原理はマルクスが発見したものではなかつた。彼はたんにこれに「生きた労働者」という名前をつけたにすぎぬ。この原理を発見したのはヘーゲルだ。崩壊において、精神自身は、それがもはや世界にたいして対立的ではなく、まさに共同体の内面に存する精神だということを発見する。ヘーゲルが初期の著作のなかでのべたように、「絶対的な道徳的全体性は人民いがいのなにものでもない。……（そして）自然の原理という要素をうけとる人民は、それを適用する使命をもつている」

ヘーゲルの人間主義は、あの最も複雑な哲学の特徴として最も明瞭ではないかもしれない。そして、独分的には、それはマルクスからもかくされていた。だが、レーニンはかつて、概念論を「主観性あるいは自由の国」（レーニン『哲学ノート』第一分冊、松村訳岩波文庫版一三六頁）として簡潔に叙述したさいにさえ、それをとらえていた。いいかえるならば、人間は、「所有」としてではなく彼の存在の領域として自由を獲得するのである。

マルクスが、プロレタリアートの歴史的闘争のなかでみとめたのはこうした人間的個性の領域だ。こうした闘争は、断乎として一切の階級分裂を廃止するとともに、人間は階級社会ではひどく疎外され、精神労働と肉体労働との分裂によつてひどく堕落させられているので、たんに労働者が機械の附属物にされているばかりでなく科学者もまた社会を地獄のはしにみちびく原理にもとづいて建設しているのだが、さきにのべたプロレタリアートの闘争はこうして疎外され堕落させられた人間のもつている広汎な可能性を開放するのだ。

広島に原爆が投下される百年前、マルクスはつぎのようにかいた。「生活のためにひとつの基礎をもち、科学のために別の基礎をもつということはそもそもはじめから一つの虚偽なのだ」（城塚・田中訳『経済学哲学草稿』一四三頁）と。われわれは、こうした虚偽をこんなにも

永く生きてきたので、たんに修辞上ではなく文字通り、文明の運命は核装備を施したICBMの軌道のなかにおかれている。人類の存続自体が東と西の核による脅威の間の均衡に依存しているのだから、われわれは、いま自由のための斗いのなかで理論と実践を統一し、こうして哲学と現実の分裂を廃止し、哲学を「実現すること」—つまり自由を現実のものとすることの緊急さに耳を傾けねばならない。

あとがき

停滞せるアジア、寝れるアフリカ。永遠にそのような状態がつづくかのごとく、古い歴史観はみていた。そしてまた、このアジア・アフリカを、帝国主義が、「覚醒させる」という美名のもとに侵略した。帝国主義列強と競合しはじめた日本帝国主義は、この西欧帝国主義によるアジア侵略にたいする「抵抗」の名において、自らのアジア侵略を美化したのであつた。

ヘーゲルの「歴史哲学」の叙述の中では「歴史は東洋から」はじまつている。そして、その中では永遠の反復の中に停滞しつつけるアジア。アフリカは固くねむり込んでいる。

アジア・アフリカが帝国主義と植民地主義に対して起ち上るということは、世界史が、人間の自らに対する抑圧を脱出する時代に入つていることを示している。逆説的にいえば、帝国主義の侵略によつて「覚醒」せられたアジア・アフリカは、帝国主義そのものを「覚醒」させなければならない。だが、「アジアの一国」である日本のプロレタリアートは、実にこの二つの課題を負つているのである。いいかえると世界革命の中で、アジア革命の推進とアジアの侵略者日本帝国主義の打倒との二つの課題を負つているのだ。これがわれわれの下敷きである。

ラーヤ・ドナエフスカヤは、アジア・アフリカ革命の世界史的意義については、一つはアメリカ黒人運動に与える影響の点で、他方では、先進国プロレタリア革命の任務との関連で、きわめて重視しており、とくにアフリカ諸民族の解放闘争を過少に評価する「左翼」を強く及弾している。この点でわれわれは、多くのものをラーヤ「アジア・アフリカ革命」から学ぶものがあろう。

注目すべきは、汎アフリカ主義に対する批判と、旧植民地国において純粋プロレタリア革命のみを期待する立場への批判であり、とくに後者は、トロツキーへの批判、レーニンの民族問題に対する正しい態度の評価とつながつている。

ラーヤの哲学論文は、「マルクス主義と自由」と同じ問題意識によつて追究されている。日本のマルクス主義がふたたびヘーゲルの検討を課題としているとき—日本の「資本論」研究はヘーゲル研究とわたちがたくむすひついてきた—一つのチャレンジとしての意味をもつている。

マルクス主義的人間主義の「直接的」な性格とラーヤのヘーゲル評価「国家資本主義」説に関しては主体的に批判、検討しなければならないが、さしあたつての討論・研究のためにまず、この論文集を、日本の革命的労働者、学生、知識人諸君に送りたい。われわれの運動の中に現に生きている現代変革の精神を具体的理論的に展べ開いていくために。

一九六五年十二月二十九日